大岡實の建築設計理念

鉄筋コンクリート造による伝統様式の創造をめざして

Minoru Ooka's Idea of Architectural Design:
Toward A Style of Reinforced Concrete Japanese Architecture

青柳 憲昌
Norimasa Aoyagi

建築史家・大岡實は明治33（1900）年9月29日、東京深川に生まれた[1]。旧制第一高等学校を卒業した大正11年、東京帝国大学に入学した頃は「デザイナー」（建築家）になることを志していたというが、1年生のときに伊東忠太の日本建築史の講義を聴いて歴史的建築の造形に興味を抱きはじめ、2年生のときに卒業論文のテーマを建築史にすることを決意し、長谷川輝雄（当時助教授）のもとで薬師寺の建築についての論文を作成して卒業した[2]。大岡の学生時代は、歴史的「様式建築」からの脱却を主唱した分離派建築会（大正9年結成）の活躍した時代でもあり、建築家の「創造性」を重視する彼らの建築観は若い世代に多大な影響を与えたといわれるが、大岡の卒業設計（図1）を見ても、出隅を曲面としたヴォリュームの連なる外観や、アーチ形の窓が連続する立面意匠など、表現主義的な傾向が見られる。大岡の7年後輩になる関野 克（昭和8年卒）曰く、大岡の学生時代は「大正デモクラシーの洗礼を受けた幸福な青年期」であったが、その一方で大学2年生のときに関東大震災を経験した大岡ら同級生は「震災の申し子で震災復興の日本の近代建築を背負って立つ気概があった」という[3]。

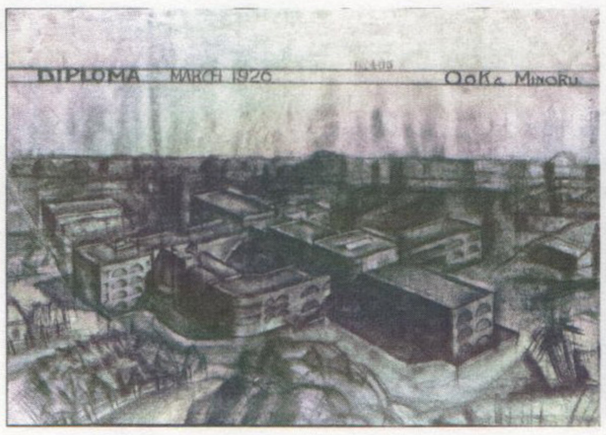
＊

大岡のキャリアを俯瞰すると、前期と後期の2期に分けられる。すなわち、前期は大正15年から昭和24年までの文部省（現文部科学省）に在籍した時代で、そこでは専ら文化財保存事業に従事した。とりわけ昭和9年に開始された法隆寺昭和大修理を中心に数多くの国宝建造物（現在の「文化財」のことを当時は「国宝」といった）の修理工事に関与し、昭和15年からは全国の修理事業を統括する役職・文部技師となった。一方、後期は、法隆寺金堂火災という一大事件のゆえに文部省を退くことになった昭和24年から昭和62（1987）年12月7日の逝去に至るまでで、昭和27年からは横浜国立大学で後進の建築史研究者の育成に励む傍ら、宗教建築を中心に精力的に建築を設計した。本稿のテーマは、大岡の後期の設計活動に焦点をあて、彼の建築設計理念を論ずることにあるが、それは前期の文化財保存事業に従事する中から醸成されてきたものと見ることもできるから、まずは前期の活動内容から以下に見てゆきたい。

1. 法隆寺昭和大修理：復原学の構築と復原方針の推進

大正15年、東京帝国大学を卒業した大岡は、約半年間の兵役の後翌年大学院に進学するが、その傍ら日本大学の講師を務めつつ、文部省の嘱託となった。はじめは非常勤で、指定建造物の台帳作成などの仕事を行っていたらしいが、法隆寺昭和大修理が始まる昭和9年頃からは、彼の師の一人・関野貞の勧めで日勤の嘱託となり、さらに昭和15年12月には、建造物修理事業の最高責任者として全国の修理全体を統括する要職・文部技師に就任した。第二次世界大戦後、昭和21年7月からは法隆寺国宝保存工事事務所の所長を兼務したが、昭和24年1月26日の法隆寺金堂火災の責任を問われるかたちで辞任し、文部省からも離れることとなった。

日本近代修理事業史上しばしば特筆されてきた法隆寺昭和大修理は、昭和9年から第二次世界大戦を挟み、昭和31年までに行われた大規模な修理事業で、府県が行う通常の修理工事とは異なり、国家による（近代で）はじめての直轄修理工事として金堂、五重塔を含む22棟もの修理工事を一挙に行うというものであった。当時の一般的な修理と比較してこの事業の規模が特に大きかったこと——全国の修理の年度別総事業費に占め



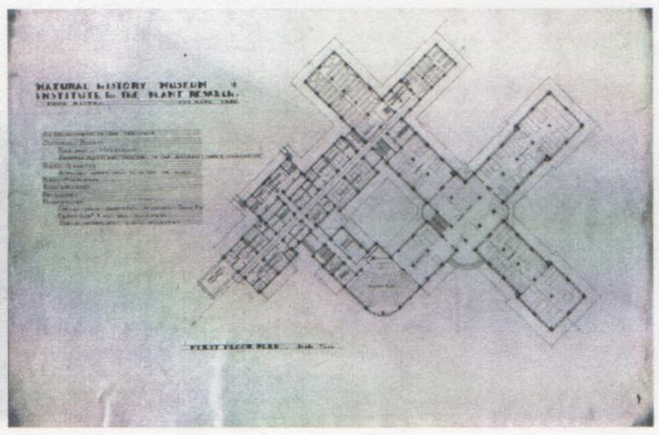


図1　大岡實卒業制作　外観パース・平面図（大正15年）

るこの事業の割合は平均して3割以上（昭和13～19年度ではおよそ5割）にもなることからは、当時の文部省がこの事業をいかに重要視していたかがうかがわれるし、その工事執行機関（法隆寺国宝保存事業部）は文部次官をはじめとする同省の要職に就く者で構成され、現場の工事事務所に技師職を2名も新設するなどして修理体制が整えられた[4]。それは、金堂、五重塔が「世界最古の木造建築」として当時から有名であったこともあるが、世界美術史上きわめて価値の高いものとされた金堂内部の壁画の保存対策が声高に叫ばれていたためでもある。表面の顔料が刻々と剥落しつつあった壁画になるべく手を触れずに旧位置のまま残すか、あるいは取り外して別の場所に保管するかの決定は、金堂の修理工事を初層を残したまま行うか、全てを解体して行うかという修理方法にも直結する大きな問題である。この問題を解決すべく、昭和14年6月に法隆寺壁画保存調査会が設置されるが、それを機に大岡は文部省の「法隆寺係」としてこの修理事業に直接的に関与するようになるのである。

大岡が法隆寺昭和大修理で行った特筆すべきことの一つは、建物を解体しながら行う学術的調査――主に建物に残された痕跡などから創建時の状態について考察する「復原」的調査――を重視する修理体制を整備しようとしたことである。この事業の現場技術者であった浅野清（1905～91）による「復原学」の構築は建築史学史上名高いが[5]、その背後に大岡の全面的な後押しがあったということはもっと注目されてよいだろう。昭和初期には一般の修理でも学術的調査が重視される気運はあったが、今日の文化財修理の行われ方に繋がる技術者の姿勢や方法は――すなわち「修理技術者」という職能は、この法隆寺昭和大修理で確立されたと考えられるからである[6]。

この事業の開始当初は、それまでにはあまりいなかった大学出身の若手技術者を多数起用し、同時進行する3つの工事毎に調査の専任者を配するという点において画期的といえる調査重視の修理体制で臨んだが、この体制は2年目の昭和10年度に当時の社会情勢を反映して事業規模が縮小されるに伴い一度廃され、調査専任者は工事主任を兼務することになった[7]。昭和14年、大岡はこの事業に参画すると同時に、伝法堂の修理開始から浅野を再び調査に専念できるように計らい、それに対する抵抗勢力の圧力を斥けて調査を推進するための「後楯（うしろだて）」となった、と後年浅野自身が回顧している[8]。周知のように、伝法堂修理における浅野の復原的調査は――「超人的な」努力（大岡の言）による垂木の釘穴調査はつとに知られる――今日の文化財修理の調査法の礎を築いたものといわれるが[9]、その輝かしい学術的成果は大岡の計らいがあったからこそなし得たともいえるのである。

また、大岡は「復原学」構築に寄与しただけではなく、実際の修理工事においても「復原」の方針を推し進めた。ここでいう「復原」は、いうまでもなく建物の創建後に改変された部分を、修理を機に改変前の状態に戻すことを意味するが、そのさいその部分の元来の状態が完全に正確に明らかになることはまずあり得ないから、その点から「復原」とは、たとえ復原史料がかなり揃っていても、復原案の作者の主観（解釈）を介在させることではじめて成立するものである。換言すれば、「復原」は多かれ少なかれ、その建物についての当事者の「解釈」の所産にほかならない（といっても、それは一般的な意味合いでの「創作」とは次元が異なるということは改めて述べるまでもないが、念のため確認しておきたい）。大岡は復原方針を推進したが、当然ながら、彼はただ闇雲（やみくも）に「復原」しようとしていたわけではない。以下に例を示すように、彼は「復原」を行うことで、彼自身が「解釈」したところの、創建の時代の建築美を再現することを目指していた。逆に言えば、それに関連しない部分はしいて「復原」しようとはしなかったのである。後述するように、こうした彼の保存修理の理念は戦後の彼の建築設計の理念と根底において連続している。

大岡の復原理念を典型的に示しているのは、先にも少し触れた伝法堂の修理である（図2）。この修理は昭和13年から18年にかけて行われたが、昭和15年10月25日、修理方針を策定する法隆寺国宝保存協議会において大岡（当時文部省嘱託）と工事現場の所長・古宇田實との間に大きな論争があった。この建物は慶長時代におこなわれた改造など後世の改変が著しかったが、このときまで古宇田は「復原」を全く行わないで修理するつもりであった。それに対して大岡は、浅野らによる復原的考察の成果をもとに、屋根の形や柱間装置など、全面的に奈良時代の姿を復原することを主張し、古宇田と真っ向から対立したのである。大岡はその議論の中で、国宝建造物の価値を「材料」、「形式」、「建物の歴史」の3点で捉えることを唱え、「建物の歴史」――つまり後世改変の跡にも残すべき価値を見ること――を最優先する古宇田の見解にも一理あるとしながらも、こと伝法堂に関してはその見解は「建築的組成ノ実体ニ対スル

図2　法隆寺東院伝法堂　昭和修理前（左）　修理後（右）

了解ヲ欠ク一方的議論」であると批判している（難解な表現だが、おそらく、創建から現在までの「歴史」＝時間の経過を尊重すべきという古宇田の見解は、明治時代から存在する「復原」批判論の繰り返しにすぎず、この建物の「建築」としての真の価値を理解しない表層的な意見だという意味合いもある）。そして、この建物に「痕跡」として残された奈良時代の「形式」（扉構え窓等の形式手法、床構造、飛檐垂木の形式などがあげられている）を保存＝復原することで「奈良時代の美」を再現することこそが「伝法堂現在ノモノガ持ツ本来ノ価値ヲ充分表現発揚セシメルコト」になると主張した[10]。結果的に、この大岡の主張に沿うかたちで全面的な復原方針がとられたことは周知の通りで[11]、この論争の後まもなく大岡は文部技師に昇格した。

ところで、戦時下から敗戦直後にかけての政治的ないし財政的に厳しい状況下において、大岡は浅野とともに法隆寺保存のために並々ならぬエネルギーを注ぎ込んでいた。昭和19年、人手や物資の不足により事業の進行に苦渋する中、法隆寺を空襲からまもるために、五重塔も金堂も初層を残して全て解体し、初層に新しく素屋根をかけ、さらに爆風から守る掩体となる土壁を築くという防空対策の実施を強行した（図3）。むろんそれと併行して、解体に伴う学術的調査も行わなければならないのであるから、浅野曰くそれは「悲壮な覚悟であった」[12]。また、戦時下から戦後にかけてこの事業はいちおう継続されてはいたものの、戦後本格的に動き出すのは昭和23年頃からであり、比較的早くに再始動できたのは、大岡らが連合国軍総司令部（GHQ）や大蔵省に必死に働きかけたからでもあった[13]。

戦後再始動した金堂・五重塔の修理方針は、所長大岡、現場主任浅野の指揮のもと、――これまでの文脈からも容易に推察されるように――全面的に「復原」を行おうとするものであった（図4）。いうまでもなく金堂大棟の両端には鬼瓦ではなく鴟尾（しび）をのせ、五重塔の五重屋根の勾配を緩くし、金堂上重四隅軒下の、龍の彫り物が巻き付いた支柱も撤去することになっていたのである[14]。これらを復原しなかったことについては現在でも批判的に語られることが多いが、大岡らがこの工事を離れなければ、法隆寺の姿は今とは随分違ったものになっていたかもしれない。当時、大岡は法隆寺金堂、五重塔の修理方針について次のように述べていた。

「吾々のなすべき仕事は、中世何回かの修理に其時代の技術が採用され改変された跡を研究し、創建当時の真の飛鳥時代の美しさを再現することである。（中略）金堂、五重塔が根本的解体を受けるのは今回が最初であつて又今後千年近くは解体されないであらう。建物の真の性質を理解するのは解体修理の時でなければ不可能で、常時外部から眺めたのでは到底細部迄之を知る事は出来ず、技工の細部、更に進んでは意匠の根元をつきとめることは絶対に出来ない、今回は文字通り千載の一遇であつて、従つてその責任は実に重大である。」（傍点引用者、以下特記ない限り同じ）[15]

「創建当時の真の飛鳥時代の美しさ」、すなわち創建の時代の建築美を再現することを目指す大岡の保存理念が、ここに明瞭に示されている。金堂の火災があったのは、法隆寺国宝保存協議会において彼らの唱える修理方針が容認されつつあった矢先であった[16]。火災事件は、丁度大岡と浅野が名古屋に出張し、現場を留守にしている間に起きた。

2. 設計活動の開始：伝統的建築の不燃構造化にむけて

昭和24年1月26日に起きた法隆寺金堂火災の責を問われた大岡は、同年3月に法隆寺修理の所長の職を辞し、文部省を休職することとなった。7月には業務上過失失火で起訴され、第一審は有罪となり禁錮六ヶ月を求刑されたが、続く再審の法廷では、裁判官に次のように「たんかをきった」ことを大岡は後年回顧している（昭和27年5月無罪確定）。

「『禁錮六ヶ月なんでもない。俺は技術屋として腕をもっている。なんとしても生きていくけれども、法隆寺のためには、今いったように本当に水盃（みずさかずき）までしてつくしてきた。今後日本を再建するものは誠意だ。われわれは責任持たされれば、とことんまでやる。国宝保存のためには、身命をなげうってやってきたんだ。一番法隆寺が焼けて悲しんでいるのは自分なんだ。だから禁錮六ヶ月についてはなんでもないんだけれども、ここで私を罪人にするようならば、今後そういう技術者はいなくなるからそう思ってくれ』。と、たんかをきったんです」[17]

まさしく、それまでの彼の半生は文化財保存、ことに法隆寺の保存事業に「水盃までしてつくしてきた」ものであった。大

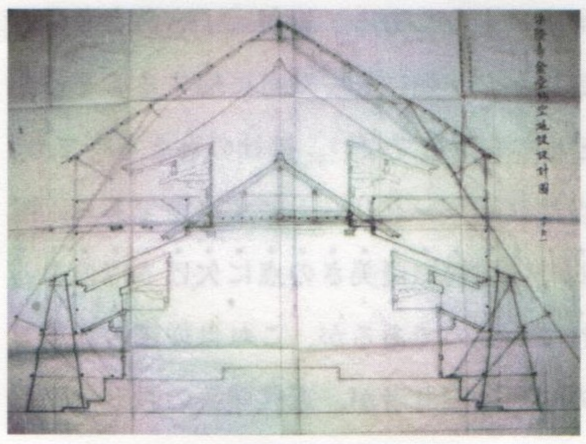


図3　法隆寺金堂防空施設設計図

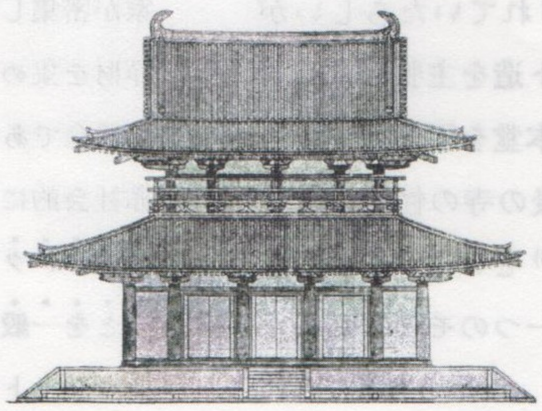


図4　法隆寺金堂復原案（大岡實）昭和23年4月発表

岡は昭和9年法隆寺昭和大修理の開始頃に恩師関野貞から文部省の保存事業の将来を託され、「二百や三百の論文書く方が大事か、文化財保護の組織を作って死ぬ方が大事か」を熟慮した末、大学の研究者になることを断念したという[18]。昭和14年、本格的に法隆寺修理に参画するようになってからは公務に追われる日々が続き、建築史研究会を共に立ち上げた盟友・足立康がそれを心配して「昔にかへる様に」と何度も忠告しにくるほど「学問」から離れかけたが[19]、その一方で、伝法堂修理で浅野の「復原学」構築を後押しし、古代建築史研究上の画期的な学問的成果を導いた。そして、その伝法堂の修理方針に関する論争を足掛かりに、修理関係者の「復原」に対する理解を深めながら、昭和大修理事業の集大成として最後に残された法隆寺金堂の修理において「飛鳥時代の建築美」を再現すべく、獅子奮迅で進んでいた。その途上で不運な火災に遭遇し、志半ばで降板させられることになったのである。上の引用文中の「一番法隆寺が焼けて悲しんでいるのは」誰か、というのをここで問い直すのは愚かしいが、それはおそらく本当に大岡であっただろう。「自分がなんとか永久に保存しようとして始めた壁画の保存事業で、壁画を焼いてしまったことは、ほんとうに今でも胸がしめられる」[20]と、火災の17年後になっても語る大岡は、「木造建築は火に弱い」という誰もが知っているあたりまえの事実を、その時改めて痛感したことだろう。それは、木造古建築の精華を知悉する大岡をして、その不燃化＝「鉄筋コンクリート造」化に取り組むことを決意させるのに十分な痛恨事であったと思う。

*

昭和24年、文部省を休職することを余儀なくされた大岡は、伊東忠太の計らいもあり[21]、休職と時をほぼ同じくして、戦災により焼失した浅草寺本堂（作品Ⅰ-1）の再建の設計を依頼される。その構造設計を担当したのは、一高時代から親しい間柄であった[22]小野薫（当時日本大学教授）である。その設計作業を終えた昭和24年10月頃、小野の紹介で双亞建築株式会社に入社し、そこで彼の設計助手を長年務めることになる松浦弘二（1915～2004）と出会い、同社はまもなく閉社したが、昭和25年大岡は自邸に「勉強部屋」を増築して松浦とともに「大岡建築研究室」を立ち上げた[23]。以下では、昭和20年代の大岡の最初期の設計活動について見てゆきたい。

浅草寺本堂（昭和33年竣工）の再建にあたり、木造にするか、あるいは「鉄筋コンクリートの近代的不燃焼構造」にするかという問題は復興関係者の間で盛んに議論されていたらしいが[24]、大岡は「私は断然鉄骨鉄筋コンクリート造を主張した」と竣工時に述懐し、その理由として、第一に本堂を不燃構造にすることをあげている。「本堂再建を機に今後の寺の性格をどうするかの根本問題を考える必要があろう」[25]という大岡の記述からは、この再建工事を今後の寺院建築の一つのモデルにしたいという彼の意気込みがうかがえる。

浅草寺本堂の外観は、寺の関係者あるいは地元の住民から旧観の保存が要望されたこともあって「全体としてボッテリした江戸時代建物の感じを出すべく努力し」（大岡の言）ながら設計されたものであったが、大岡は同時に「江戸時代そのままを再現する気にはなれず、その間に鎌倉時代や奈良時代の形式を取入れてまとめあげた」とも述べている[26]。具体的にそれは、三手先斗栱の形を薬師寺東塔から引用したこととか、建物内部の大虹梁下の持ち送りに中世仏堂風の挿肘木を用いたことなどを指すのだろう。

浅草寺本堂の次に設計されたのは光厳寺本堂（作品Ⅰ-2）（昭和29年竣工）である。鉄筋コンクリート造のフラットルーフに近い外観の建物で、軒裏には垂木型を疎らに作り出しつつ、正面中央に階段状屋根の塔屋をたて、伝統的寺院建築の容姿とは大分趣きが異なっている。設計の過程では、立面に柱型の出ないものや、完全なフラットルーフの2階建ての案（スケッチ）も検討した形跡が大岡資料の図面に残されているが、住職から「高梁（虹梁のこと：引用者註）を入るべきところは入れて戴くことが大衆の非難を免るる便法かと存じ候」（昭和25年11月17日付の手紙、大岡資料6-3-2-2）という婉曲な言いまわしの注文もあり[27]、寺院建築の因襲になるべく従いたい寺側の意向を参酌しつつ、最終案にいたったようである。

また、素盞雄神社（作品Ⅱ-1）では戦災で焼失した拝殿を設計した（昭和32年竣工）。再建にあたり神社関係者の間では木造にすることが前提になっていたと考えられる。というのも昭和28年に結成された素盞雄神社造営協賛会では、「一、旧拝殿の再現」と「二、木造（檜）にして現代感覚を加味したもの」の2案について話し合われたとされ、その結果新しい提案の「三、不燃性建物にして、今後の神社建築に代表的建物となるべきもの」――この文言からは不燃構造の神社建築のプロトタイプをつくろうという関係者の意気込みが大いに感じられる――と決まったので大岡に設計を依頼したという[28]。上記の第一案には構造が明記されないが、文脈上これを木造と考えれば、そもそも鉄筋コンクリート造という選択肢はほとんどなかったのだろう。大岡が、社殿を不燃構造にすることを下記のように強く主張していることから推察すると、この第三案の決定と大岡への設計依頼はじつはほとんど表裏一体だったはずである。

「不燃性建物（鉄筋コンクリート造）にすべき理由　市街地の人家密集の度は年と共に激しくなり、火災による建物の焼失量は、現在新築の量に追付かぬ状態である。素盞雄神社の地も附近に民家が密集して、火災の危険は十分にある。折角氏子崇敬者多数の浄財を集めて建築した建物が、一朝にして烏有に帰することは頗る残念であり、設計者としても本意でない。神社の為を考へても、亦社会的に考へても、当然鉄筋コンクリートにすべきである。唯鉄筋コンクリートにする時は建物の優美さの点に欠ける点のあることを一般には恐れられているのであるが、これは従来の鉄筋コンクリートによる此種の建物の設計者が、近代建築の設計者で日本建築の真髄を知らないためと、日本風の建物を鉄筋コンクリー

トによつて設計する場合の特別の工夫に経験がないためである。今回は設計者の永年の経験により、この点を十分考慮して設計するから、決して斯る心配は不要のものと確信する」[29]

鉄筋コンクリート造にすると「建物の優美さ」に欠けるという点が一般に恐れられている——この言葉は、氏子たちの間において社殿を不燃構造にすることへの反発が少なからずあったことをうかがわせる。そして、その心配はご無用と断ずる大岡の言葉は、彼の設計理念の核心を図らずも露わにしている——神社建築に限らず、鉄筋コンクリート造の建築設計において大岡は、伝統的木造建築の「優美さ」という言葉でここで表現されているもの、たとえば部材同士の比例感覚や繊細な屋根の曲線的表現などを再現（創造）することを主眼としていたと考えられるからである。

このように大岡は設計活動を開始した当初から、（耐震性や経済性というよりも）不燃性に重点を置いた観点から鉄筋コンクリート造を積極的に採用した。大岡の全建築作品105棟を通じて、じつに88棟（84%）が鉄筋コンクリート造を用いており、かなり小規模のものとか、施主から要望されたとかでない限り、基本的にはその構造を採用していたということができそうである。しかし、その外観の意匠を見ると、前記の光厳寺で近代主義的に新形態の案出を試みたとはいえ、結果的には、大岡の建築作品は「伝統的」といわれる一般的イメージの範疇からほとんど抜け出ていない。それは、彼の作品の多くが宗教建築であったということとも無関係ではないだろうが（「お寺はやはり瓦の大きな屋根がなければ、拝む気持ちになれない」）、鉄筋コンクリート造を用いながら過去の日本建築を範とする大岡の建築は当時結構批判されたらしい[30]。大岡が建築設計を旺盛に行った1950～60年代といえば、日本の建築界では戦後モダニズム建築の全盛期で、当時の風潮を考えるとそうした批判が出るのは無理もないだろう。新しい建築材料や構造技術を用いるのだから、過去の建築＝「様式建築」とは異なる、新しい建築形態となるべきだという見解の背後にある思想的基盤は、近代合理主義（モダニズム）の建築思想、ひいては下部構造が上部構造を規定するという唯物史観にあったが、そうした見解は、たとえば古代ギリシア建築のドリス様式がその起源である木造建築のディテールを「様式化」したものであったということを持ち出すまでもなく——大岡も著書の中でこの木造起源説に言及している[31]——歴史上必ずしも建築の真理ではない。次に掲げる大岡の自筆原稿を見ると、過去の建築の猿真似だという批判を受けながらも、彼はむしろ批判者の見方自体に（少なくとも大岡自身の建築を評価する上では）限界があるのだと反駁しようとしていたと思われる。

「私は本質的な問題としては、材料、構造が全く変わったのであるから、その材料構造の特性をいかした形も全く新しい形にすべきであるというのが根本観念である。ところが私に設計を依頼して来られる人は私が日本古建築の専門家であるという認識の上に立ってのことであり、また実際社寺の復興を計画し、仕事を進めて行く方には大体お年寄であって、『お寺はやはり瓦の大きな屋根がなければ、参詣して、拝む気持になれない』というのが、ほとんど全部であって、まだ本堂や本殿についてはほとんど新しい形の設計をする機会を与えられなかった。（中略）概形を見ての批判は、奈良や京都の日本建築そのままの真似だと言われる。しかし私としては必ずしもそうではないのである。」[32]

それでは、大岡の建築において、設計者の創意は一体どこに発揮されているのだろうか。上の自筆原稿は、いかにもこの後に大岡の弁明が続きそうである。しかし、残念なことに、彼の筆はここで止まってしまっているので、それは、我々が「解釈」するほかに知る術はない。

3.「建築様式」の解釈と再現

大岡の建築作品を通底しているのは、日本建築史上の「建築様式」の再現を志向していること、それも特に大岡の解釈するところの、建築様式の造形的特質がよく現れているところを重点的に再現しようとしていることである。「様式」の概念はいうまでもなく普遍的・固定的なものではなく、時代や個人の見方を反映して不断に変化を繰り返すものであるが（たとえば明治時代の「唐様」は昭和時代のそれと同じものではない[33]）、大岡は「様式」を、建築の「造形」を機軸に——たとえば建設技術や生産機構などではなく——理解し、設計の際にはその「様式」を構成する造形的要素（と彼が考えたもの）を優先的に再現しようとしていたと考えられる。

1. 寺院建築　寺院伽藍の中心的建築の設計において大岡が再現しようとしたのは飛鳥・奈良時代の建築様式であった。大岡は、自らが設計した建物の設計主旨を記す中で、「飛鳥・奈良時代」の建築の「風格」や、それが醸し出す「気分」を取り入れたということを繰り返し述べている[34]。木割が太く、堂々とした容姿のこの時代の建築は、鉄筋コンクリート造の造形としても相応（ふさわ）しいと考えたのかもしれない。それらの文献では「飛鳥・奈良時代」と、両時代をまとめて言うのを常としているが、とりわけ「飛鳥様式」＝法隆寺の様式にその重点が置かれていたと考えたほうがよい。大岡は自著『日本の建築』（1967）の中で両時代の建築の良さについて再三語っており、「表現や風格において、奈良時代を日本の最高峰」（p.27）というように、奈良時代の建築に最高の評価を与えながらも、それよりも古い飛鳥様式の建築については次のように述べている。

「しかし造形意匠の問題は、むずかしい。私はいま、奈良時代本期の方がより様式的に完成された時期であると述べたが、といって、法隆寺の金堂や中門の、あの力強い構成（中略）には限りない魅

力を感じるのである。(中略) 唐招提寺の完好な比例や、細部の申し分のない意匠にはまったく敬服し賞美するが、法隆寺の力感あふれる造形に圧倒される。これは各人の造形感覚の差、趣味にもおおいに関係するのであろう。」(同上、pp.56-57)

つまりここで大岡は、法隆寺の「力感あふれる」造形に、奈良時代の建築よりも共感する点が多いという個人的な心情を吐露しているわけである。大岡の設計した寺院建築には、確かに、飛鳥様式のモチーフが多用されている。たとえば大棟両端の鴟尾(しび)(法隆寺玉虫厨子の形に倣う)とか雲形斗栱(くもがたときょう)とか、あるいは二重基壇や錣葺(しころ)きの屋根など、造形上のポイントは多くの作品で飛鳥様式を採用している。聖光寺本堂(しょうこうじ 作品I-8)はそれが最もよく示された事例である。「雲形斗栱」はいずれも法隆寺のものの正確なトレースではなく、のちに大仏様系木鼻の繰り型と融合して形が変容するが(後述)、医王寺本堂や東江寺本堂などのそれは、法隆寺のものを下敷きに猪の目(い め)型の透かしなどをあしらい、大岡が自ら考案したものであった。

錣葺きの屋根は、大岡の造形上の好みをよく示している。急勾配の切妻と緩勾配の寄棟を組み合わせた錣葺きは、造形的な「屹立性」、つまり「そそり立つ」感じがよいとして大岡が特に好んだ屋根の形式であった[35]。大岡はその再現にあたり、法隆寺玉虫厨子の錣葺きのように切妻と寄棟を一体的に見せるために、端においても両者の境の段差をなるべく小さくするべく、上下屋根の反らせ方の工夫を繰り返していた[36]。こうした点には大岡の造形意欲がよく発揮されているといえよう。ちなみに、創建時の法隆寺金堂は錣葺きではないというのが今日の定説で、それは昭和修理の際に浅野清と西岡常一により、小屋垂木と軒垂木を連絡する逆三角形状の繋ぎ材が発見されたことなどにより、通常の入母屋造りであった蓋然性が高くなったからであるが[37]、それでもなお大岡は自説を曲げず、その後も錣葺きの金堂復原図を公表し続けた。この事実は、一面において「復原」がそもそも解釈の産物であるということを改めて認識させると同時に、他面において彼の作品に見られる錣葺きへの偏向を考えると、大岡の「飛鳥様式」の解釈は彼一流の造形理念と共感(シンパシー)にもとづいていたということをも暗示している。

II. 神社建築　大岡が設計した神社建築(社殿)のほぼ全てが、本殿と拝殿を相の間(弊殿)で繋ぎ、それぞれの部分に別の屋根をかける、桃山・江戸時代の神社建築(霊廟)によく用いられた「権現造り(ごんげん)」を採用している。弊殿(へいでん)は、石の間(土間)ではなく、拝殿とほぼ同じ床高とする輪王寺大猷院と同じ形式である。こうした平面形式は祭祀の際の利便性が高いことから近代の神社でよく採用されたものと思われるが[38]、弊殿の両脇、拝殿との境に「神饌所(しんせんじょ)」と「控え室」の小室を設ける点は大岡の神社建築に共通する特徴である。

大岡は『日本の建築』(前掲)において権現造りの造形について、「本殿と拝殿を相の間でつないだ『権現造り』といわれる形式で、屋根の形はかなり複雑であるが、全体が軽やかで、軸組とのバランスもよく整っている」(p.130)と、「複雑」かつ「軽やか」な屋根の形にその造形的特質を見ており、その点を考慮して大岡建築の屋根の形もデザインされていると考えられる。大岡の設計した拝殿は、神明造りの2社を除いて基本的には入母屋造りの屋根を用い、なおかつ正面中央に千鳥破風を付け、正面向拝には唐破風を付けるという点において、北野天満宮や大崎八幡神社等の典型的な権現造りの社殿によく見られる屋根の形式を踏襲しつつ、屋根の連なりで複雑性を出すことを意図した外観意匠になっている。たとえば、従来の権現造りは拝殿と弊殿の棟高を揃えるのが一般的だが、大岡の社殿は弊殿の棟高を拝殿よりもやや下げ、拝殿の独立性を際立たせているし、規模の小さい拝殿は屋根が寂しくなるせいか、神饌所と控え室にも別の屋根をかけて拝殿両脇から低い屋根を張り出したような格好にしている。さきにも触れた素盞雄神社拝殿(作品II-1)は正面に千鳥破風、正側面3方向に向拝(うち2つは唐破風付き)を設け、とりわけ賑やかな屋根の形となっている。けれども、そこには本格的な権現造りの社殿に見られる華やかな装飾は見られない。精緻で複雑な詰組(つめぐみ)斗栱は大斗肘木か一手先斗栱に、豪華な虹梁蟇股の妻飾りは簡素な豕叉首(いのこさす)にとってかわっている。

III. 歴史的建築の復元　大岡の「復元」建築[39]は、なまじ史実にもとづく復原案をもとに設計されるものであるだけに、「建築様式」の解釈と再現という設計理念をわかりやすい形で示している。それは文化財修理で「復原」方針を推進した彼の前半生の保存理念とも根底において繋がっている。古材再用の有無に違いがあるとはいえ、「復元」も「復原」も失われた旧の姿を当事者の解釈を加えながら再現しようとする点で本質的に同じ行為だからである。大岡は、建物が創建された時代の「造形感覚」——彼は「建築様式」を同時代の「造形感覚」の表象と捉えた——を今日に残された同時代同種の遺構などから汲み取りつつ、それを具体的な建物というかたちで現代に再生(リバイバル)しようとしたのである。

そのことをよく示すのは薬師寺金堂(作品III-4)の基本設計で、この建物の上層妻面を2間としたのは、奈良時代金堂は斗栱と斗栱の間に「ゆったり」とした間隔をとるものであると大岡が考えたからであったし、その斗栱が天井に隠れる内部空間は奈良時代金堂に「完璧」なかたちで示された「ドーミカルな空間構成」——外側から内側に向かって次第に天井が高くなる空間のこと——を重視したためであった[40]。また、ほかにも興福寺食堂(作品III-1)の内部空間は、天井を張らずに大虹梁や叉首を現しとしているが、これは彼が「化粧屋根裏式の感じ」を奈良時代の造形的特徴の一つと見ていたこととの関連から理解されるものであるし[41]、松前福山城天守(作品III-2)の外観で、鉄筋コンクリートの壁を窓回りに廻して壁厚を実際よりも厚く見せているのは、城郭建築一般の造形的特質を「厚い壁を窓が切りぬいているところの感じ」に見ていたことに対応するものと思

われる（『日本の建築』前掲、p.162）。

Ⅳ.仏舎利塔　大岡はインドのストゥーパの形（覆鉢型）をした仏舎利塔の設計を数多く手がけており、その設計にむけてインドやスリランカに８回にもおよぶ実地調査を行ったほど、その仕事に意欲的であった。大岡の仏舎利塔は、はじめはスリランカのアヌラダプーラ遺跡の小ストゥーパを模した形態をしているものが多かったようであるが、後になるとロンドン仏舎利塔（作品Ⅳ-9）のような日本の多宝塔に近いものが出てくる。そもそも日本密教に固有の建築種である多宝塔（宝塔）の源流はインドのストゥーパにあり、それを変形した円形塔身の上に宝形の屋根をのせたものが「宝塔」であったということを考えれば、結果的に大岡は自らのキャリアにおいて仏舎利塔を「日本化」させていった、といえるかもしれない。

4. 鉄筋コンクリート造による伝統様式の創造をめざして

①雲形斗栱と大仏様挿肘木の融合　大岡の寺院建築は「飛鳥様式」のモチーフを多用したものだったことを上に述べたが、斗栱については雲形斗栱のほかに大仏様（だいぶつよう）（鎌倉時代）のモチーフである「挿肘木（さしひじき）」を併用している。「挿肘木」は、大斗を用いず肘木を直接柱に差し込むものだが、大岡がこれを用いたのは、大斗の斗繰り（下部のくびれ）による柱の断面欠損を避けるためであった。挿肘木下に長押（なげし）を打ち、あたかもその接合部を補強しているかのように見せる意匠的手法も一貫している。大岡は、鉄筋コンクリート造の社寺建築では一般に「非常に手間がかかるという考えから組物を敬遠する傾向が強い」と指摘しながらも、斗栱（組物）は寺院建築の「形態上の生命」なので、ある程度の工費を見込める場合は斗栱をつくるべきという見解を示しつつ、次のように述べている。

「大斗の下の方がくびれてくると、柱の強さは、そのくびれて小さくなった面積で決まってくる。これは、はなはだ不経済であると同時に、もしそのくびれて小さくなった部分で、十分力をもつような大きな面積をとると、柱全体が恐ろしく太くなってしまって、到底形を整えることができない。これを救済する方法として、差肘木（ママ）と称して、大斗を用いず、肘木を柱に直接突き刺す形式がある。（中略）木造の場合は、実際に肘木が柱を貫通しているのであるから、その感じが出てよいが、鉄筋コンクリートの場合は、実際に突き刺さった感じにならないので好ましくない。私が採用している方法は肘木を太く長い腕木にして、下を長押で受けて、差肘木の好ましくない感じを救っている。」[42]

1960年代までの大岡作品では、大仏様系木鼻をもつ挿肘木は主に通肘木に用いられるのみで、その下の持ち送りは飛鳥様式の雲形斗栱に似た形態のものを用いることが多かった。大仏様と飛鳥様式を組み合わせた斗栱を用いていたわけである。「雲形斗栱」は、斗と肘木を一体的につくるため、鉄筋コンクリートでつくるのにも好都合であると大岡は述べている[43]。

そもそも斗栱に挿肘木のモチーフを用いるのは、昭和初期の青松寺本堂（三輪幸左衛門設計、昭和６年）にも見られるから（図5）、大岡の創案になるものではない。浅草寺本堂（作品Ⅰ-1）では、側柱上斗栱は三手先斗栱を鉄筋コンクリートで再現しているが、内部では「挿肘木」を用いており、通肘木を支承する一手先の挿肘木や、大虹梁を持ち送る三手先の挿肘木などは前記青松寺の手法を思わせる。次の川崎大師平間寺本堂（作品Ⅰ-3）では外観に現れる斗栱にも「挿肘木」を用い、尾垂木を支承する力肘木下に大仏様系の繰り形（弧線とＳ字曲線を組み合わせる）の木鼻をもつ持ち送りを用いるが、軒裏に天井のない一軒の構法は明らかに法隆寺を参照したもので、それゆえこの持ち送りは大仏様のモチーフを用いながらも、一瞥すると雲形斗栱のようにも見える（図6）。東江寺本堂では、細部の凹凸を省略しつつ猪の目型の透かしをあしらった雲形肘木と、その上の大仏様系木鼻を用いた力肘木により丸桁を支承している。この形式はこれ以降も続き、法蔵院本堂、聖光寺本堂（作品Ⅰ-8）も同様である（この２作品の雲形肘木の形はより法隆寺のものに近い）。さらに下って、増上寺大殿（作品Ⅰ-10）と長安寺本堂（作品Ⅰ-14）では、斗を介して大仏様の挿肘木を二段に重ねた、より手の込んだものとなる。その下の持ち送りは雲形ではなく大仏様系の繰り形のものだが、丸桁（出桁）を支承する秤肘木は法隆寺の尾垂木上の雲形肘木を連想させ、飛鳥様式でも大仏様でもない別のものになっている印象である。

②垂木・斗栱の構造材的扱い、および簡略化と省略　寺院建築の不燃化＝鉄筋コンクリート造化を行うにあたり、大きな課題の一つとなるのは、垂木と斗栱をどのように再現するか（し

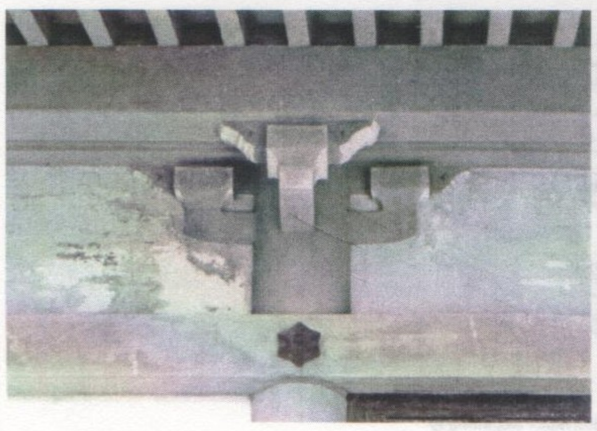


図５　青松寺本堂　斗栱写真

図６　川崎大師平間寺　斗栱写真

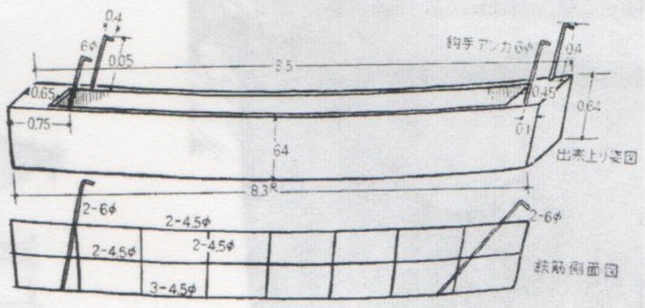


図７　浅草寺本堂　垂木構造図

ないか）という問題である。それらは、木造では本来構造的意味を持つ建築部位であるが、鉄筋コンクリート造でこれを構造材として再現することは施工上・経済上の観点からかなり難しい。以下に記すように大岡は、川崎大師平間寺本堂の設計においてこれらをあくまでも構造材として再現したが、結果的にはそれに無理を感じたらしく、これ以降はそのような試みを行っていない。しかし、そもそも江戸時代以前の建築において、すでに小屋組構造の発達により化粧垂木はほとんど「装飾化」していたということを考え合わせるとき、そうした試みをあえて行ったということ自体、構造の合理性を重視し、装飾的要素を極力排除しようとする大岡の建築観の裏返しであったと見ることもできる。

最初に設計した浅草寺本堂では、「組物及ビ肘木ハ構造体トシテ考ヘズ単ナル荷重トシテ扱ヒ」と構造計算書に明記されているように、垂木はプレキャストの鉄筋コンクリート製だから（荷重軽減のために中空とする）、屋根荷重を負担しないことは明らかである（図7）[44]。また、斗栱にも軒荷重は全くかからず、その自重は柱が負担するものとして計算されている。それに続く川崎大師本堂では、構造担当者が「形のためだけに椎（ママ）木をつけたり斗栱の形を作ったりすることは出来るだけやめて、椎木、斗栱、出桁などすべての部分を構造材として利用する」[45]という設計方針を掲げているように、垂木も斗栱も、屋根の瓦やスラブなどの荷重を負担する構造材であったことが、構造計算書からも読み取れる[46]。こうした構造材としての垂木と斗栱の扱いはこの作品以降は見られないが、そうした試行からは、できれば垂木や斗栱を装飾的付加物にしたくないという大岡の建築観の一側面がうかがえる（こうした構造的試行は初期の大岡作品の構造を担当した小野薫の協力があったからこそ成し得たとも言えるだろう[47]）。

先にも触れたように、大岡は、本格的寺院建築に斗栱の存在は必要不可欠と考えていたようであるが、その一方で垂木については、省略もしくは簡略化することを試みている。たとえば、光厳寺本堂では軒裏に垂木型の薄い凸面を疎らに作り出して簡略化しているし、逆に凹状のスリットを作り出して近世建築の板軒（いたのき）の厚板の目地のように見せているものも少なくない（図8）。泉光院本堂は、垂木の表現を全くなくし、軒裏を平滑面にした例である。昭和20年代の終わりから30年代に竣工したものの工費を比較すると、光厳寺本堂や清水寺本堂など垂木を省略したものの坪単価が格段に低いから、垂木の表現の有無は予算との関係もあったと思われる[48]。しかし、本格的な本堂建築では繁（しげ）垂木にしている例が圧倒的に多いから、おそらく大岡は、仏堂に「繁垂木」は欠かせないものと考えていたのであろう。

③二重基壇の平面的および立面的扱い　大岡の寺院建築は、「飛鳥様式」の様式的特徴の一つである二重基壇を用いることが多かったという点はさきに指摘した通りであるが、その多くには上成（じょうせい）基壇に和様の高欄（こうらん）が設けられ、飛鳥様式にはない、外観を呈している。高欄の意匠は、断面円形の架木とそれを受ける斗と斗束をもつ組高欄で、いずれも架木・平桁とも端に反りがない点で古式である（なお真光寺と聖光寺は、斗束の上部が高く反り上がる薬師寺東塔のものに似る）。上成基壇の犬走りは平面図に「縁」と表記され、使用上「廻り縁」のように扱う主旨のものであったらしい。正面の屋根には一間幅あるいは三間幅の縋破風を用いて向拝が付けられ、向拝柱は下成基壇に立てられるから、立面意匠上上成基壇は「廻り縁」に見立てられているようである――向拝、廻り縁、長押をもつ正面一帯は、飛鳥様式というよりも中世和様仏堂の容姿を思わせるものがある。

また、機能上要求された諸室を一つの建物に収容する上で、主要階を2階として1階に部屋をつくらなければならない場合は二重基壇をやめ、廻り縁を実際につくっている（図9）。それは、おそらく基壇に窓をあけて採光する訳にはいかないという事情もあるだろうが、そのことにより建物のたちがかなり高くなるという傾向がある。浅草寺や増上寺などスケールの大きい建物の場合は、地階の階高をある程度とれるのでそれがあまり顕在化しないが、逗子延命寺や長安寺ではたちが高くなりすぎるのを、高欄付きの廻り縁と向拝がやや和らげているようである。

＊

大岡の建築作品を通覧してみたときに想起されるのは、彼の師の一人・伊東忠太の有名な「建築進化論」である。よく知られているように伊東は「建築進化の原則より見たる我邦建築の前途」（『建築雑誌』明治42年1月号、pp.4-36）の中でギリシア、ペルシア、小アジアなど、木造から石造に「進化」したという世界各地の古代建築をあげ、将来の日本の建築も木造から石造に「進化」すべきと主張した[49]。伊東はとりわけ古代ギリシア建築の木造起源説について再三言及しつつ（図10）、あたかも木造から石造にかわったことで古典様式を生み出した

図8　医王寺本堂　軒裏

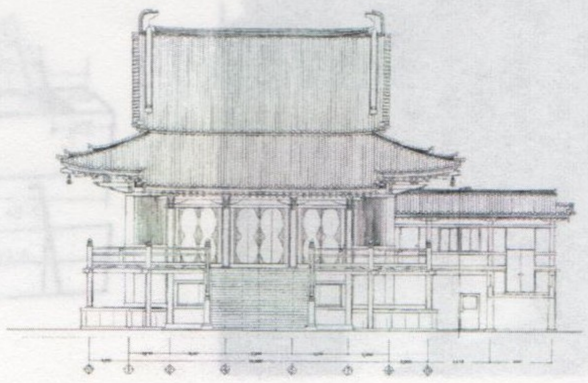


図9　長安寺本堂　立面図

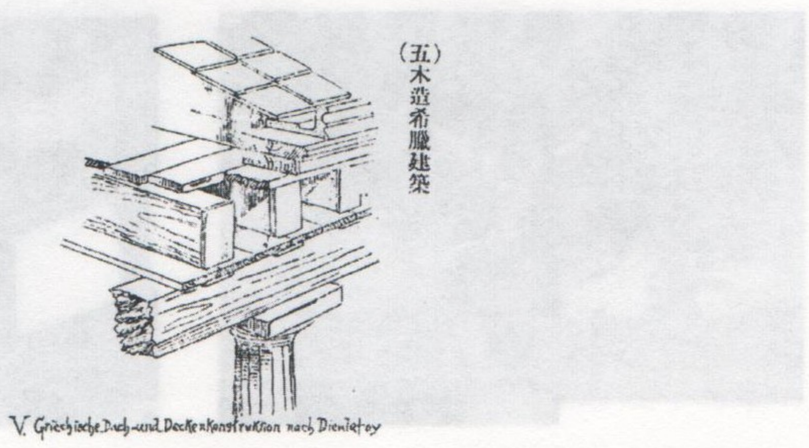


図10　古代ギリシア建築の木造起源説説明図（伊東忠太）

古代ギリシアのように、日本でも伝統的木造建築を「石造化」し、新しい「国民様式」を創造すべきと主張したのである。けれども伊東は、建築材料の変化に伴う様式の創造は、一般に非常に長い年月がかかることを述べつつ、「材料の変更ある場合には、初めの間は新材料を以て旧形式を作る、即ち材料は変つても形式は当分変らないで古式のまゝで続くものである、これをSubstitutionの時代と云ふ。（中略）この過渡時代は或は数十年或は数百年も続くことがある」(p.7) と述べている。つまり、まずは石造により「古式」（木造時代の建築）の忠実な再現をする「Substitutionの時代」が来て、そののち建物各部が次第に変形してゆき、そうした不断の「変形」の蓄積により一つの新しい「建築様式」が出来上がるというのである。だが、その「変形」は一体どういうことを意味するのか。当時の建築家たちにとって、その点が難解であったが故に、「進化論」は当時あまり説得力を持ち得なかったと思われる[50]。

おそらく「変形」とは、新しい建築材料を用いて「古式」を再現することが何らかの点で不合理となる、あるいはほとんど不可能である部分を、実際にそれをつくる上でより合理的になるように（換言すれば、ある必然性をもった形態に）変えることを意味すると考えられる。「変形」の実例として伊東は中国建築の例をひき、木造から石造（磚造を含む）に「進化」したことで軒を深く出せなくなり、それにより垂木が装飾化し、その帰結として西洋建築のコーニス（cornice）のようなものになったと指摘する。また、日本建築の斗栱を、斗と肘木を一つ一つ石材で製作するのは無理があるので、「変形して一塊に寄せ堅めて見たならば、優に石を以て造るべき一種の柱頭の型を案出することが出来るだらう」(p.29) という提案もしている。伊東の理論に従えば、「Substitutionの時代」においては、そうした試行錯誤をたえず繰り返すことが必要で、そうしたトライ・アンド・エラーを通して一つの「様式」に収斂させていくのだから、そのぶん建築家たちはこぞって「様式の創造」という旗印のもと、意匠と構造との整合性の課題に主体的に取り組なければならないわけである。

戦後の大岡の試み、とりわけ鉄筋コンクリート造による寺社建築の旺盛な設計活動は、――彼が意識していたにせよ、していなかったにせよ――この「進化論」の影響下において行われたのではないか[51]。かたや伊東は石造または煉瓦造を想定し、大岡は鉄筋コンクリート造であったが（伊東の後の論考で将来の構造は鉄筋コンクリート造にとって代わる）、かたや伊東は「宗教建築」の時代は終焉したと主張し、大岡はそれの近代化に取り組んだが、そうした彼我の相違はむろんここではあまり重要ではない。大岡は彼の同時代を、伊東のいう「Substitutionの時代」に見立て、それゆえに、まずは忠実に伝統的木造建築の形態を鉄筋コンクリート造で再現しようとしたのではないか。そうした上で、施工上・経済上不合理となる部分に大岡なりの「変形」を加えたのではないか。垂木を構造材としてつくろうとしたが、それに無理があることがわかったので結局装飾として付けたり、一方で近世建築の板軒のように見せながら垂木を省略してみたり、柱の断面欠損をなくすために大仏様の挿肘木を引用したりしたのは、そうした彼のたゆまぬ試行錯誤の一つ一つであったといえるのではないか。

日本建築の歴史を繙くと様々な「様式」があることに気づくが、「変形」を行うにはその出発点となるところの「木造時代」の建築の姿＝建築様式を、いちおうは措定しておく必要性が出てくるはずである。大岡は、寺院建築の本堂に法隆寺に代表される「飛鳥様式」（神社建築の社殿には「権現造り」）にそれを求め、「変形」を加える部分には、より合理的と大岡が考えた他の建築様式の細部意匠を引用し、融合させた。既述のように、飛鳥様式で統一せずに大仏様の挿肘木を併用した斗栱はその一つであるが、向拝を付けつつ基壇と一体化した「廻り縁」や「長押」で構成されるその立面は中世和様仏堂を想起させるし、鴟尾や高欄などの細部意匠に奈良時代の建築のものを引用したところも少なくない。こうした「変形」の帰結として、一見すると「飛鳥様式」のようでありながらも、よくよく見ると、かつてどこにも存在しなかったものがそこに現出している。それは大岡が次世代、次々世代の建築家たちに託した「伝統様式の創造」のための、彼なりの一つの試案であった。

＊

設計活動を開始する随分前、ちょうど大岡が文化財保存事業に精魂を傾けるようになった頃、彼は『建築様式』（昭和7年）という著書の中で、明治以降の日本の建築界が辿った「不幸な運命」を嘆きつつ、次のように述べている (p.375)。

「しかし歴史的に考へて見ると、日本の建築界は不幸な運命を受けたと言はなければならない。明治初年以降欧州建築が輸入され、漸く二十年以降日本人の手によつて建設される様になり、以降多数の大きな努力によつて漸く西洋建築が理解され始めたのであつたが、未だ真に日本に適する日本化された建築が起らぬ中、既に欧州の建築界は一大方向転換をしてしまつたので、日本も遂にその渦中に巻き込まれたのであつた。（中略）これが現代日本建築の無定見と不統一の根本的禍根をなして居ると思われるのである。（中略）勿論かゝるやかましい建築思想の声をよそにして実際の問題即ち材料施工等の方面は刻々進歩しつゝある。建築の発達はやかましい議論よりもかゝる小部分の実際問題が重大なのであつて、真に新時代の建築が生れるには、今頃の若い建築家の絶えざる努力に待たなければならない。」

註

1）江戸末期の大岡家は沼津藩主水野忠敬に仕える武士階級であったが、祖父亨（1884～1906）の代に明治維新があり、維新後埼玉や新潟などを転々としたのち、明治21年深川に移住したらしい（『大岡家系譜』大岡資料・未整理書類）。

2）『薬師寺論（卒論）』大岡資料4-3-11-1

3）関野克「大岡先生を偲ぶ」『協会通信』昭和63年2月、p.2

4）拙論文『法隆寺昭和大修理を中心とする国宝保存法時代の建造物修理に示された保存の概念』（博士論文）、2008、pp.168-172

5）太田博太郎『建築史の先達たち』1983、彰国社、pp.81-88

6）『法隆寺昭和大修理を中心とする国宝保存法時代の建造物修理に示された保存の概念』前掲、pp.172-184

7）浅野清『古寺解体』学生社、昭和44年、p.31

8）浅野清「大岡さんと私」『建築史学』1988年3月号、p.137

9）太田博太郎『建築史の先達たち』前掲、pp.81-88

10）「伝法堂現状変更ニ関スル大岡嘱託ノ意見（保存課長宛書面ヨリ抜粋）」大岡資料6-11-31-3

11）この協議会で事業部長・青戸精一は、昭和15年3月の文部省文書「国宝建造物維持修理要項」を引き、「正ニ之ニ当テ嵌マル」として大岡案の実施を可決した。同文書はじつは大岡を中心に作成されたもので、保存事業史上「復原」をはじめて明文化したものであった。

12）浅野清「大岡さんと私」前掲、p.138

13）大岡實「最終講義『日本古建築の特性と私の半生』」『大岡實先生著述作品目録』昭和41年、pp.32-34

14）拙稿「法隆寺金堂・五重塔昭和修理の方針策定過程に示された保存の概念」『日本建築学会計画系論文集』2007年3月、pp.275-282

15）大岡實「法隆寺國宝保存工事について」『建築雑誌』昭和22年8月号、p.23

16）昭和21年5月26日の法隆寺国宝保存協議会で「金堂及五重塔調査に関する中間報告」があった（大岡資料6-11-34-50）。

17）大岡實「最終講義『日本古建築の特性と私の半生』」前掲、p.27

18）大岡實「最終講義『日本古建築の特性と私の半生』」前掲、pp.22-23

19）大岡實「足立君の研究生活」『建築史』昭和17年3月、pp.99-105

20）大岡實「最終講義『日本古建築の特性と私の半生』」前掲、p.27

21）大森公亮「今次の本堂再建」『昭和本堂再建誌』浅草寺発行、昭和33年、p.31

22）大岡實「日大の頃の小野の思い出」『建築雑誌』昭和32年4月号、p.3

23）「松浦弘二　自叙伝」（大岡實建築研究所蔵）。松浦弘二は、富山県井波町の宮大工・松浦愛一郎の次男である。なお、「大岡建築研究室」は昭和45年前後から「大岡實建築研究所」と名称変更した。

24）大森公亮「今次の本堂再建」『昭和本堂再建誌』前掲、p.31

25）『あさ草観音　第一号』昭和24年3月、p.2、大岡資料6-3-2-14

26）大岡實「所感—設計監理について」「浅草寺本堂再建工事報告」『昭和本堂再建誌』所収、前掲、p.58

27）山田なつみ『建築史家大岡實の新築社寺設計』横浜国立大学修士論文、2006、p.38

28）大岡實「素盞雄神社社殿再建設計要旨」（松浦資料）。同資料は昭和29年6月例大祭の頃に作成されたものである。

29）大岡實「素盞雄神社社殿再建設計要旨」前掲

30）関口欣也「大岡實先生と横浜国立大学」『協会通信』昭和63年2月、p.20

31）古代ギリシア建築の木造起源説については大岡の『高等建築学　建築様式2　西洋東洋建築様式』（昭和10年、常磐書房、pp.53-54）に、トリグリフ（Triglyph）はそもそも梁の木鼻で、メトープ（Metope）は嵌板であるなどと説明され、それらは「石造建築の細部として、効果的な部分のみを形式的に取扱はれた」と述べられている。

32）大岡自筆原稿「鉄筋コンクリートによる日本風社寺建築の設計」大岡資料4-3-11-122

33）拙稿「昭和戦前期における『唐様』概念の変容と禅宗様仏堂の修復」『日本建築学会計画系論文集』2013年2月、pp.455-463

34）大岡實「山門の建築について」（『お大師さまとともに—第五集—』所収、川崎大師平間寺発行、1977、pp.29-30）など。

35）大岡實「増上寺本堂の建築」『建築画報』1975年6月、p.27

36）大岡實「増上寺本堂の建築」前掲、p.27

37）浅野清『法隆寺建築綜観—昭和修理を通じて見た法隆寺建築の研究』便利堂、1953、pp.119-120

38）大正末期から昭和初期にかけて角南隆が関与した神社建築にこの形式が用いられたことが指摘されている（藤岡洋保『近代の神社建築行政に関する研究』科学研究費補助金研究成果報告書、2000、p.86）。

39）本稿で「復元」は「過去に実在した歴史的な建物を、学術的な復原案に基づき、全て新材により再建すること」と定義する。

40）大岡實「奈良時代の寺院建築」『月刊文化財』昭和47年6月号、p.33

41）大岡實「興福寺収蔵庫の建築について」『興福寺収蔵庫竣工記念』所収、興福寺、昭和34年、p.8

42）大岡實「山門の建築について」前掲、p.34

43）大岡自筆原稿「川崎大師本堂の建築について」大岡資料4-3-11-118

44）「浅草寺本堂再建工事報告」『昭和本堂再建誌』所収、前掲、p.15

45）「川崎大師本堂の構造について」大岡資料4-3-11-118

46）小野薫「平間寺構造計算書」昭和27年3月、大岡資料6-3-4-2

47）大岡は、川崎大師本堂の構造について「同級生であり、親友であった故小野薫が担当した。浅草寺は柱、梁、束による日本的構造であったが、川崎の場合は、全体をラーメンとして計算した。出来上って見ると素人が見ても全体が均一な、実に良い構造であった」と述べている（「川崎大師の諸建築」大岡資料4-3-11-125、pp.10-11、『有鄰』昭和52年12月10日4頁掲載）。著名な構造家・武藤清も小野を高く評価していた（「小野君の思い出」『建築雑誌』昭和32年4月号）。

48）光厳寺本堂は坪単価7万3千円余り、浅草寺本堂53万3千円、市場寺本堂24万9千円、清水寺本堂18万3千円、川崎大師本堂67万円である。『昭和国勢総覧（下）』（東洋経済新報社、1980、p.203）によれば、当該期間の物価指数は344乃至356で、あまり変動はない。

49）鉄筋コンクリート造は明治20年代から日本の建築界に紹介され、明治40年代になると国内に実作も出現していたが、伊東のこの論考では将来の構造として専ら石造・煉瓦造を想定している。伊東の後の論考で将来の構造は鉄筋コンクリート造にとって代わる。

50）稲垣栄三『日本の近代建築—その成立過程—』（丸善、1959、p.163）にも「当時のさし迫った課題と背景のなかで、それはほとんど説得力をもつことができなかった」とある。伊東は「進化主義」と「折衷主義」を分けつつ前者をとるべきというが、同時に「進化」の過程において様式の「折衷」は「一種の手段」になるともいうから、「折衷」と「変形」は伊東の中で相似関係にあったと考えられるが、「折衷そのものは目的ではない」と明言する以上、「変形」の真意は別のところにあったはずである。

51）大岡が「進化論」に論究した文献は今回見出せなかったが、大岡が学生時代に作成した「日本建築史　伊東教授」と題されたノート（大岡資料・未整理書類）には、進化論にもとづく歴史観が綴られている。

図版出典

図1　大岡資料（未整理図面）

図2　『法隆寺國寶保存工事報告書　第八冊』法隆寺国宝保存事業部、昭和18年

図3　大岡資料6-11-33-8

図4　『科学世界』昭和23年4月号

図5　『鉄筋コンクリート造の寺院建築』横山秀哉、彰国社、昭和52年

図7　「浅草寺本堂再建工事報告」『昭和本堂再建誌』浅草寺発行、昭和33年

図9　松浦資料

図10　『建築雑誌』明治42年1月号

I－1

浅草寺本堂　東京都台東区　1958

（『昭和本堂再建落慶開帳記念』浅草寺）

昭和20年3月10日の東京大空襲で焼失した浅草寺旧本堂は、慶安年間（江戸時代）に建てられたもので、東京に残された代表的な江戸時代仏堂の一つであった。その再建に向けて昭和23年10月に浅草寺復興協賛会が設立された。同会の顧問には各界著名人が名を連ね、その中には伊東忠太の名もある。伊東は昭和8年の本堂修理でも顧問を務めていた。昭和24年4月頃、再建本堂に関する寺側の要望がまとめられたが、それと時をほぼ同じくして、法隆寺金堂火災事件のために文部省から離れたばかりの大岡に設計依頼があった（その背景には伊東の計らいがあった）。戦後に展開される大岡の設計活動の第一作である。構造設計は大岡と親交の深かった小野薫が担当し、昭和24年11月には構造図を含め、大岡の基本設計図がほぼ完成した。同じ頃施工業者の入札が行われ、紆余曲折の末清水建設と工事契約することになり、昭和26年5月に着工した。

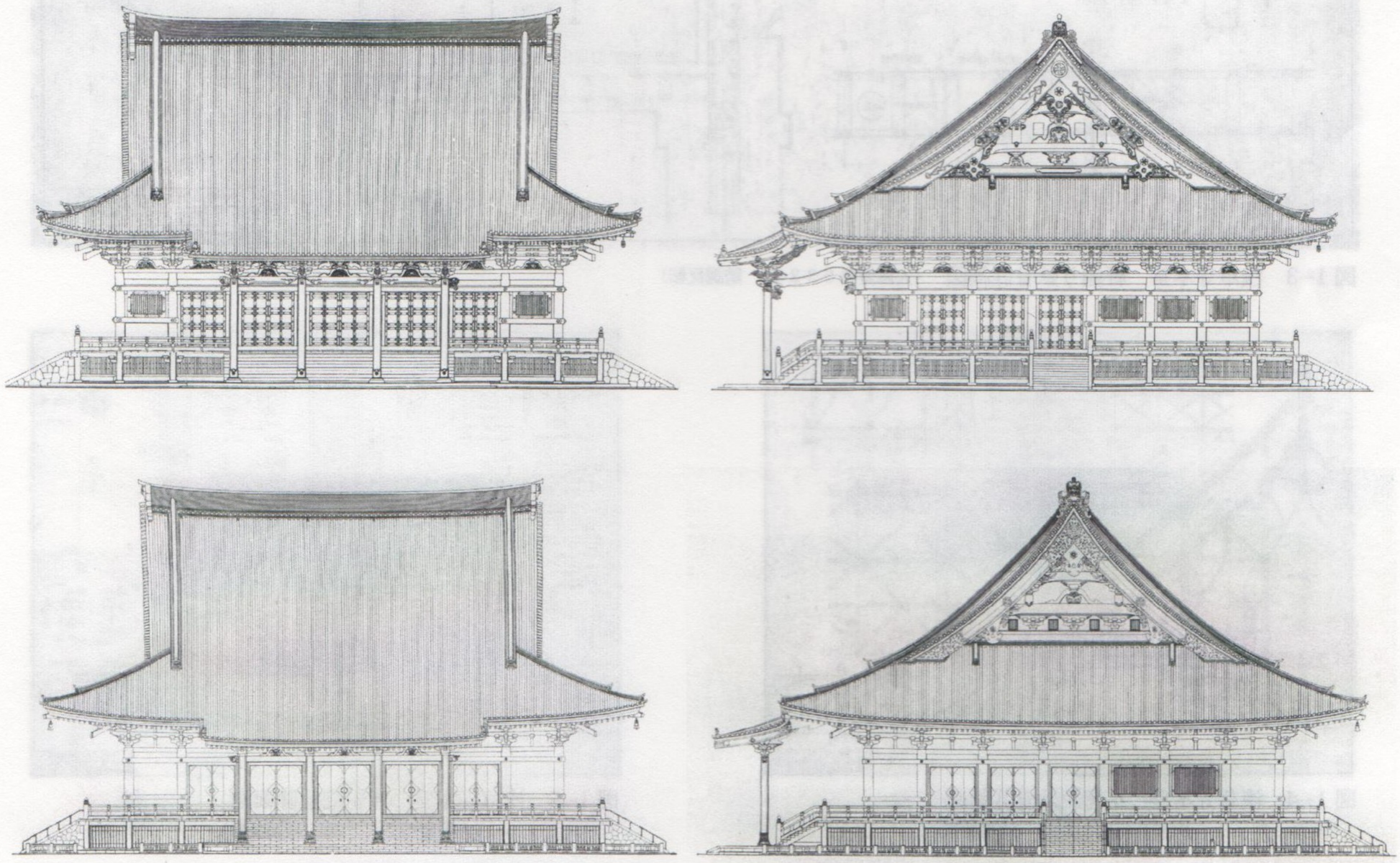


図1–1　浅草寺旧本堂（上）　再建本堂（下）　正面・側面立面図　（『昭和本堂再建誌』浅草寺）

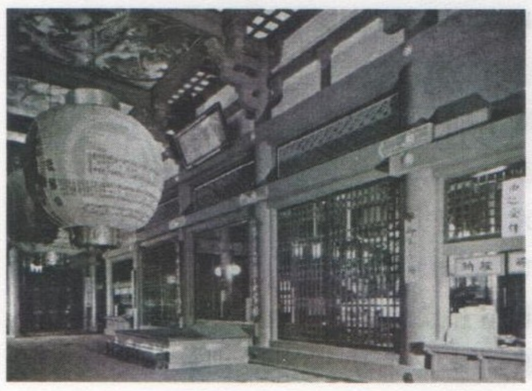


図1–2　浅草寺本堂　外陣内観写真
（『昭和本堂再建誌』浅草寺）

浅草寺が大岡に提示した要望書には平面計画の細部に至るまで明記され、新旧の平面図を比較しても旧本堂からの変化はほとんど見られない。寺側は旧本堂の外観の再現を求めたが、大岡は「私には組物や軒廻りや部材の比例等においては江戸時代そのままを再現する気にはなれず、その間に鎌倉時代や奈良時代の形式を取り入れ」たと述べている。三手先斗栱は明らかに薬師寺東塔のものを引用し、中備えも簡素な間斗束に変え、軒廻りに「ゆったりした感」を出すことが意図されている。内部の大虹梁両端を持ち送る挿肘木（左図）などは中世仏堂の手法であり、屋根も屋垂みを大きくとっているので江戸時代の「ボッテリとした感じ」は抑制されている。一方、彩色や飾金具により江戸時代の華やかさを演出することを目論んだと設計者は述べている。

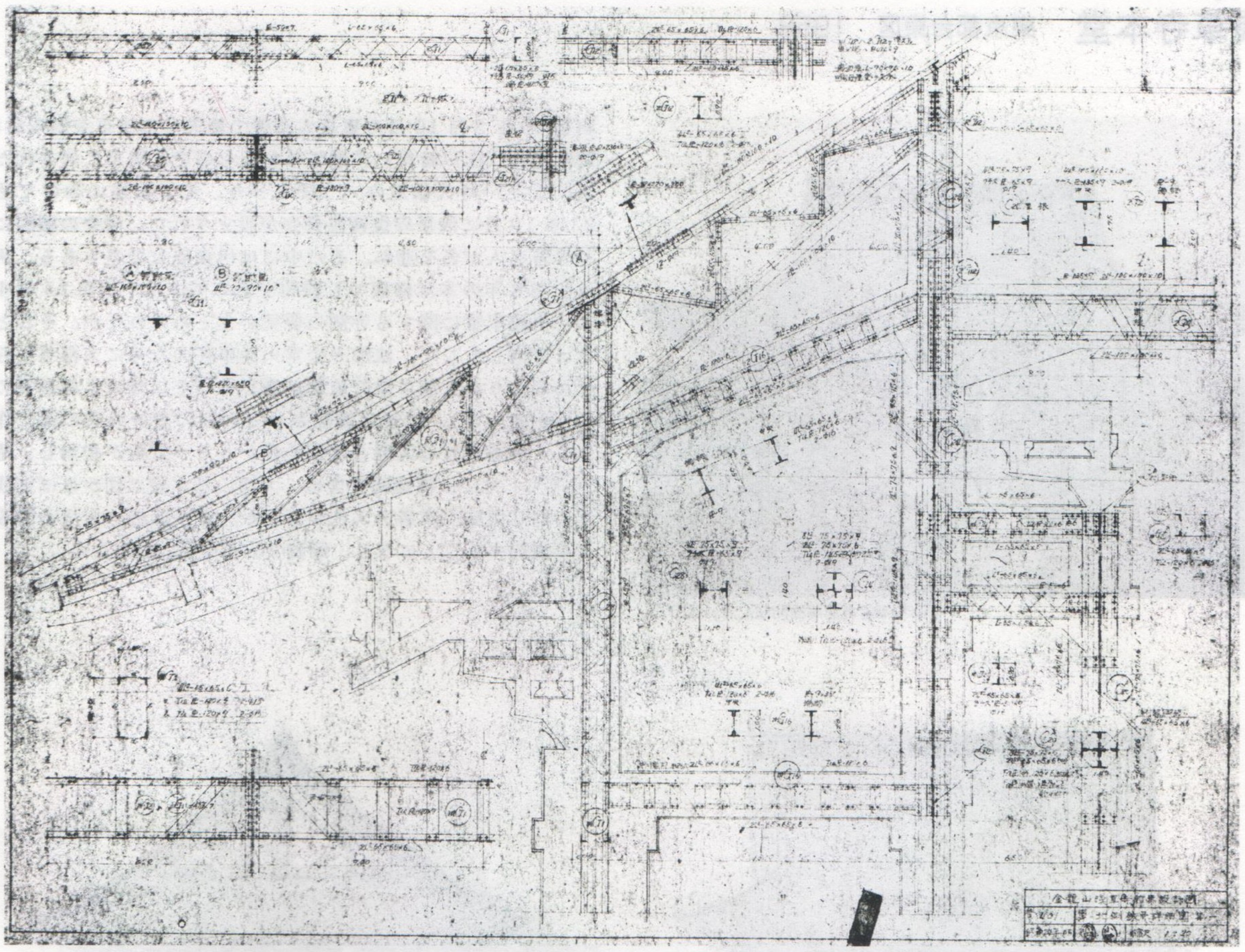


図 1–3　浅草寺本堂　軒廻り鉄骨詳細図　（大岡資料 6-3-2-23　階調反転）

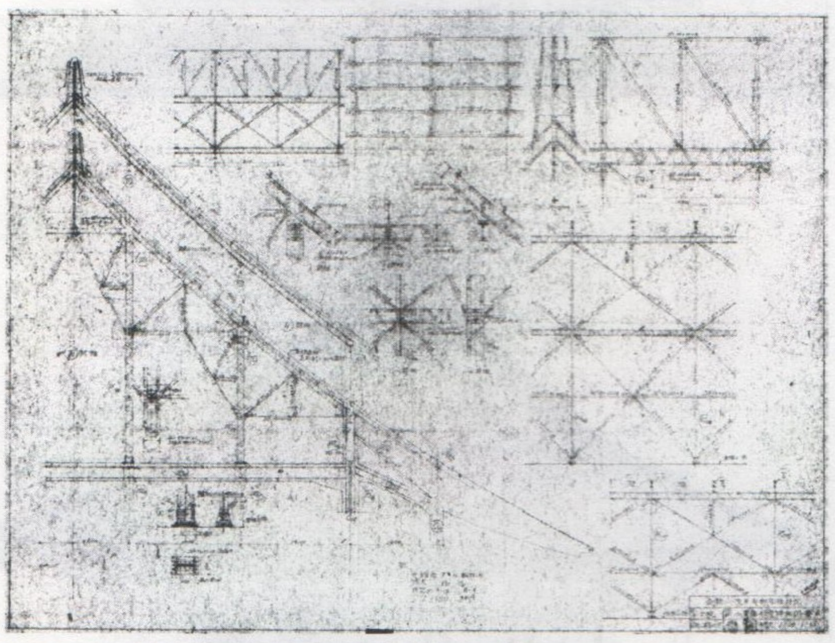


図 1–4　浅草寺本堂　小屋組鉄骨詳細図
（大岡資料 6-3-2-23　階調反転）

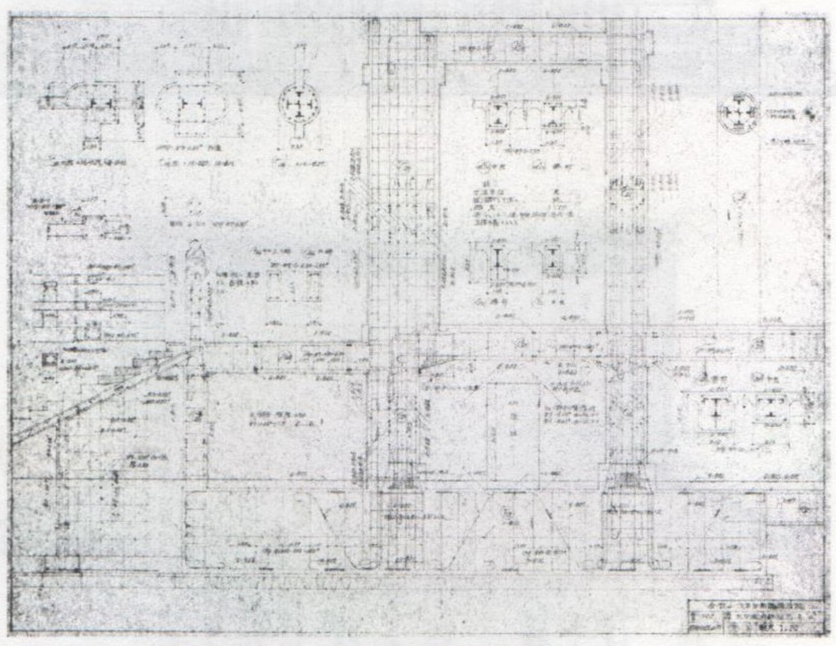


図 1–5　浅草寺本堂　床組配筋詳細図
（大岡資料 6-3-2-23　階調反転）

図 1–6　浅草寺本堂　三手先斗栱施工中写真
（大岡資料 1-1-3-0, B02-021）

最初に設計した浅草寺本堂では、斗栱も垂木も構造材ではなく、装飾的付加物であった。構造計算書には「組物及ビ肘木ハ構造体トシテ考ヘズ単ナル荷重トシテ扱ヒ」と記され、三手先斗栱は荷重を担わず、その自重は柱が負担するものとして計算されている。垂木も中空のプレキャスト・コンクリート製で、軒裏に後付けしたものである。浅草寺の構造は「柱、梁、束による日本的構造であつた」と大岡は述べている。その真意はわからないが、側柱上を支点とする鉄骨鉄筋コンクリート造の巨大な天秤梁を用いて軒荷重を支え（図 1–3）、この天秤梁は構造計算書に「桔木（はねぎ）」と表記されているから、設計者は伝統木造の構法を鉄筋コンクリート造に応用しようとしたと考えられる。小屋組は鉄骨トラスの大梁を鉄筋コンクリートの「束」で支える構造になっており、側柱と入側柱の基礎同士を連結して柱下部の拘束力を高めている（図 1–4,5）。

I −2

光厳寺本堂　富山県富山市　1954

光厳寺の旧本堂は、天正9（1581）年建立の建物であったと伝えられるが、昭和20年の戦火により全焼した。大岡は浅草寺本堂の設計作業を終えた昭和24年10月頃、小野薫の紹介で、双堊建築株式会社に短期間籍を置くことになった。この建物の設計は、同社在籍の時期に依頼されたものである（同社はまもなく閉業する）。当時の同社工務部長で、これ以降長年大岡の助手を務めることになる松浦弘二の出身地は富山県であったから、もともと同寺と繋がりがあったのかもしれない。昭和25年10月頃、試案（A～C）を作成し、寺側の意見を取り入れて同年12月に基本設計を終えた。この設計で大岡は、鉄筋コンクリート造に相応しい寺院建築の形態の案出を試みた。

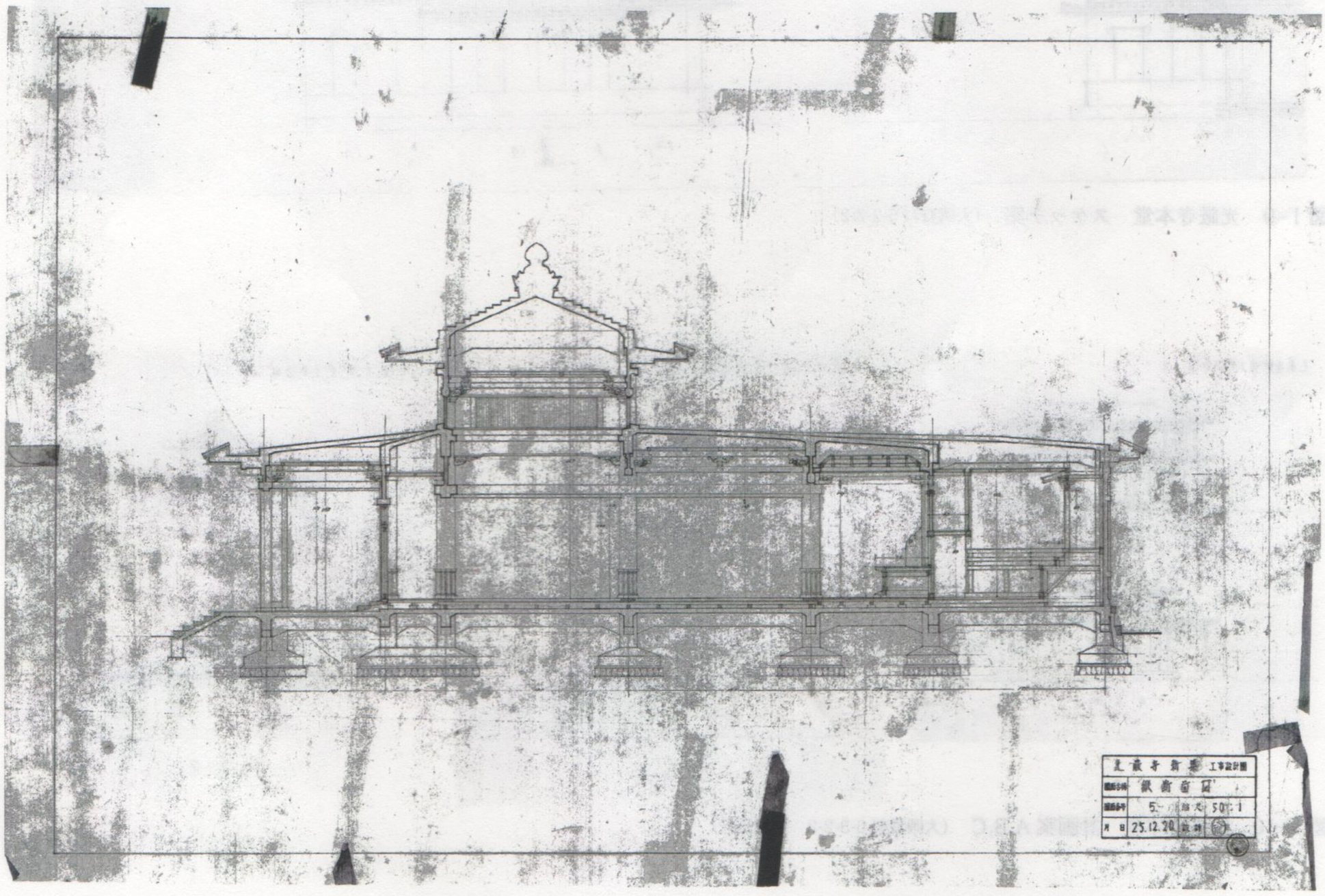


図1−7　光厳寺本堂　断面図

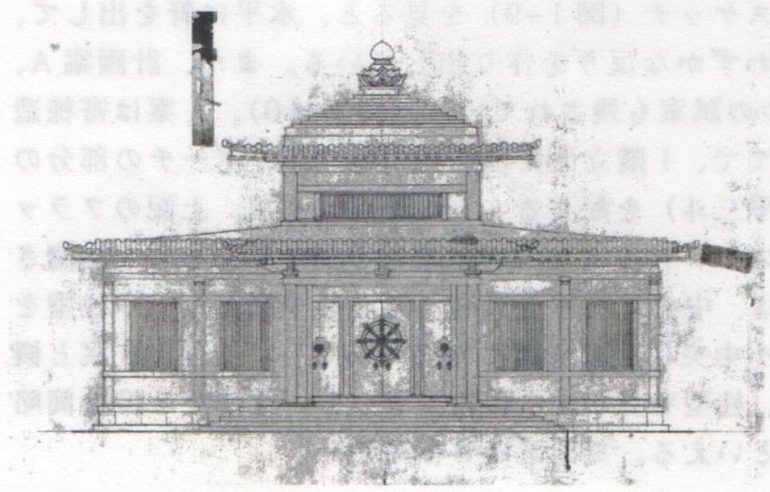


図1−8　光厳寺本堂　正立面図

光厳寺本堂はフラットルーフに近い外観の建物で、正面中央に階段状屋根の塔屋をたてる。大岡の寺院建築では、奥行きの深い平面の場合には大きな屋根をかけるのをやめて、この光厳寺のように、軒を浅く出し、その部分のみに瓦を葺くというタイプも少なくない（光厳寺は設計段階で軒は瓦葺きであったが、銅板葺きで実施された）。それらは、(1) 正面中央に塔屋を設けるもの（光厳寺本堂、本能寺本堂）、(2) 塔屋を付けないもの（東郷寺本堂）、(3) 二階建にして正面片側のみに塔屋を設ける非対称のタイプ（真楽寺本堂）の3つの類型に分けられる。これらは日本建築史上の様式をもとに設計したものではなく、大岡が考案した一つの類型である。

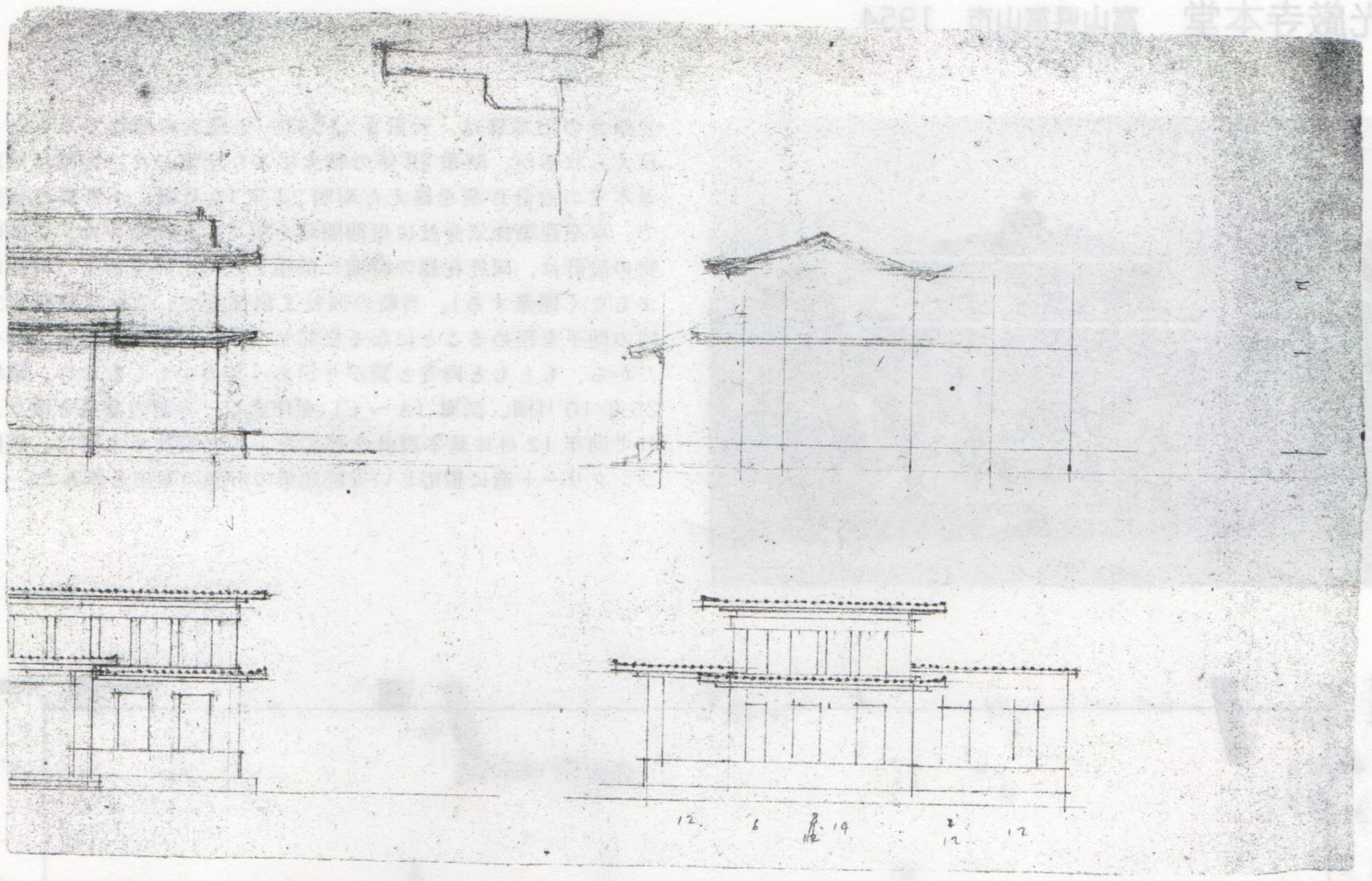


図 1–9　光厳寺本堂　スケッチ案　（大岡資料 6-3-2-2）

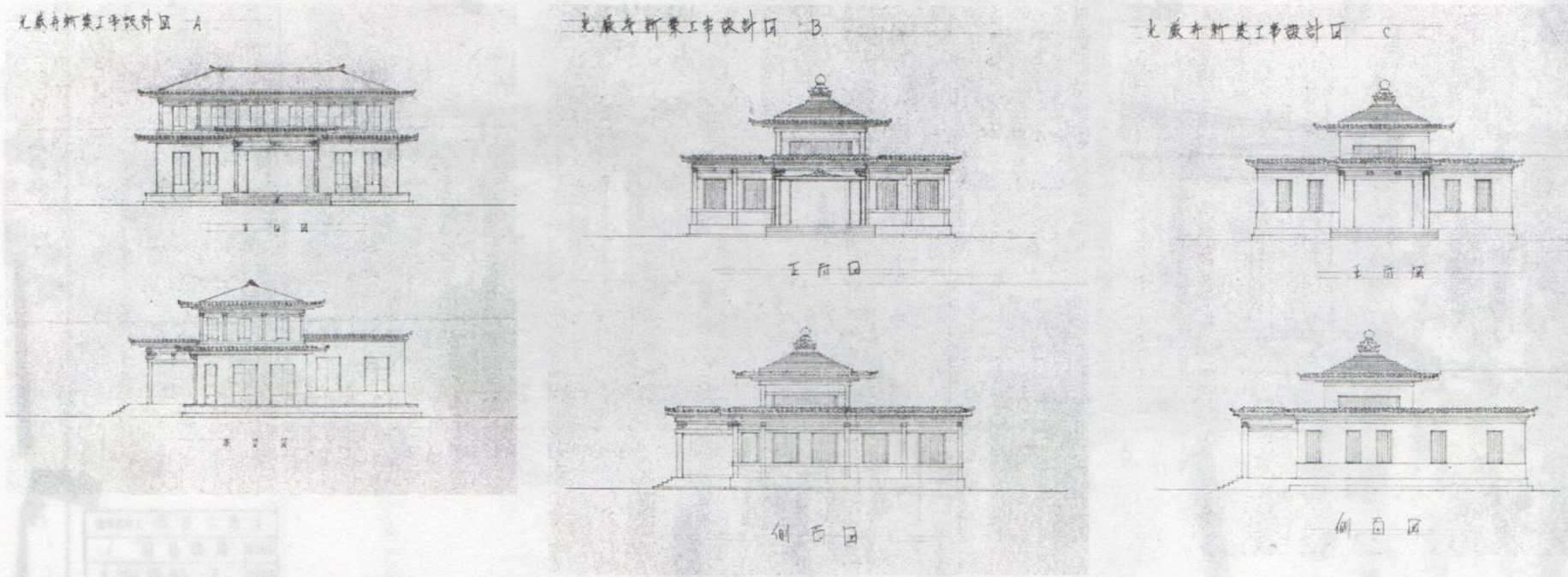


図 1–10　光厳寺本堂　計画案 A,B,C　（大岡資料 6-3-2-2　階調反転）

設計の過程では、完全なフラットルーフの案を検討した形跡もある。そのスケッチ（図 1–9）を見ると、水平に軒を出して、軒の隅ではわずかな反りを作り出している。また、計画案 A、B、C の 3 つの試案も残されている（図 1–10）。A 案は寄棟造りの 2 階建てで、1 階立面には柱型が現れず、ポーチの部分のみに組物（平三斗）を配するというものである。上記のフラットルーフのスケッチは A 案の作成過程で描かれたものと推測される。B 案は、中央に塔屋を設け、窓を連子窓としつつ柱型を見せ、ポーチ中央に蟇股を置くものである。C 案は、B 案と概形は近いが、柱型を見せず、組物もないという点で B 案を簡略化したものといえる。実施案は B 案に近い。

I −3

川崎大師平間寺本堂　神奈川県川崎市　1964

（大岡資料 1-2-5-10）

川崎大師平間寺（へいけんじ）の旧本堂は、天保5（1834）年建立であったとされるが、昭和20年4月15日の戦災で焼失した。旧本堂は入母屋造りの木造で、建坪184坪であったというから、戦後の再建にあたり本堂の規模はかなり拡大されたといえる（建坪302坪）。大岡が基本設計を完了したのは昭和27年3月頃で、同年10月に着工し、昭和32年2月躯体工事完了、昭和39年落慶法要が行われた。設計者は大岡實と、文化財修理技術者・乾兼松の共同設計になっている。構造は小野薫が担当し、浅草寺本堂設計の反省点を踏まえ、垂木や斗栱を構造材として再現している。また、この建物の設計の際に、奥深い平面に古代建築風の平入りの入母屋屋根をかけるための、様々な試行錯誤が行われ（設計当初は妻入りの計画案が作成されていた）、そこで考案された背面の屋根のかけ方はこれ以降の大岡作品の常套手段となった。

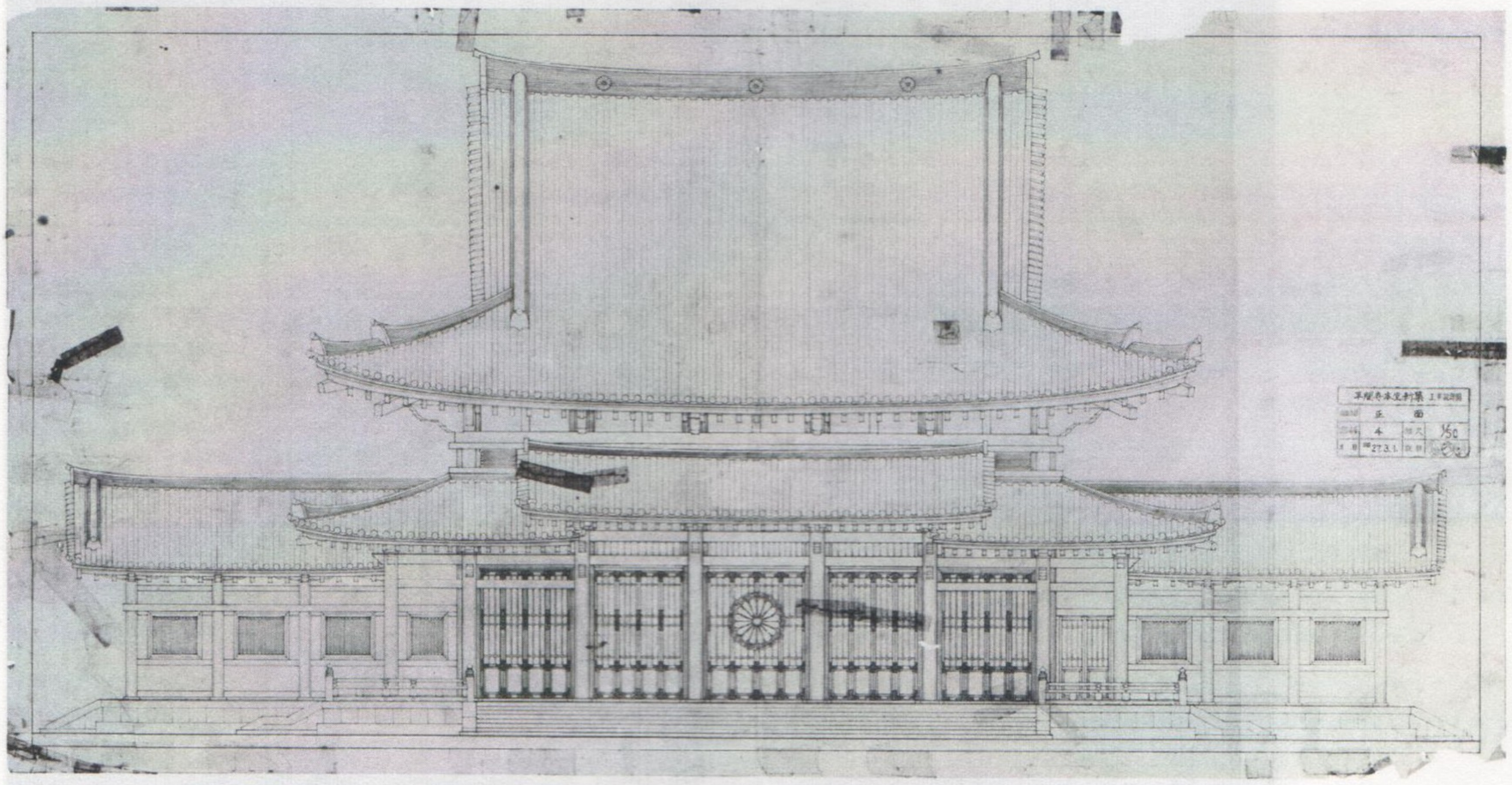


図 1−11　川崎大師平間寺本堂　立面図（正面）

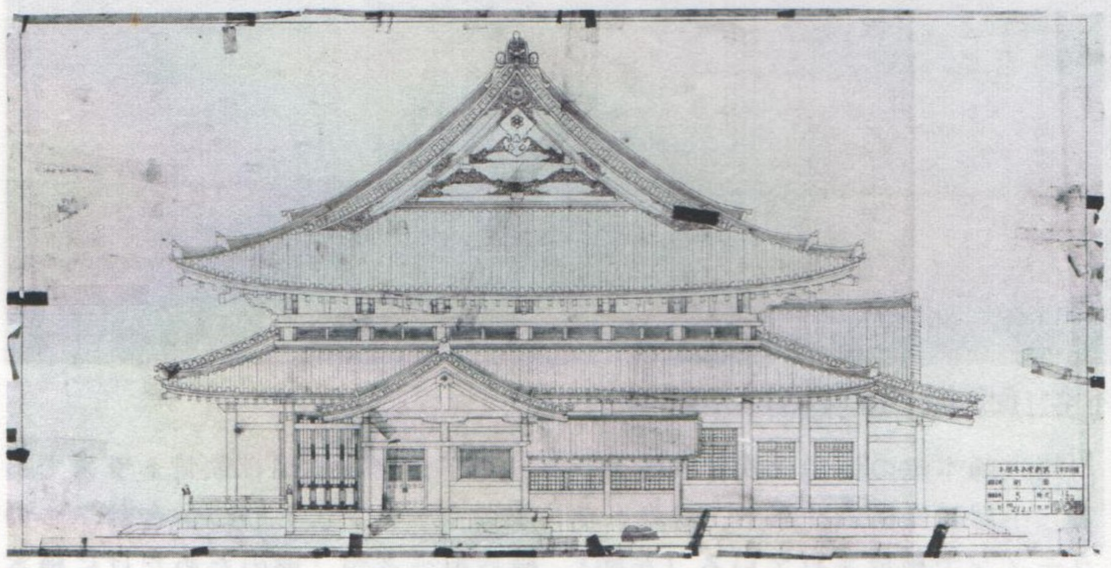


図 1−12　川崎大師平間寺本堂　立面図（側面）

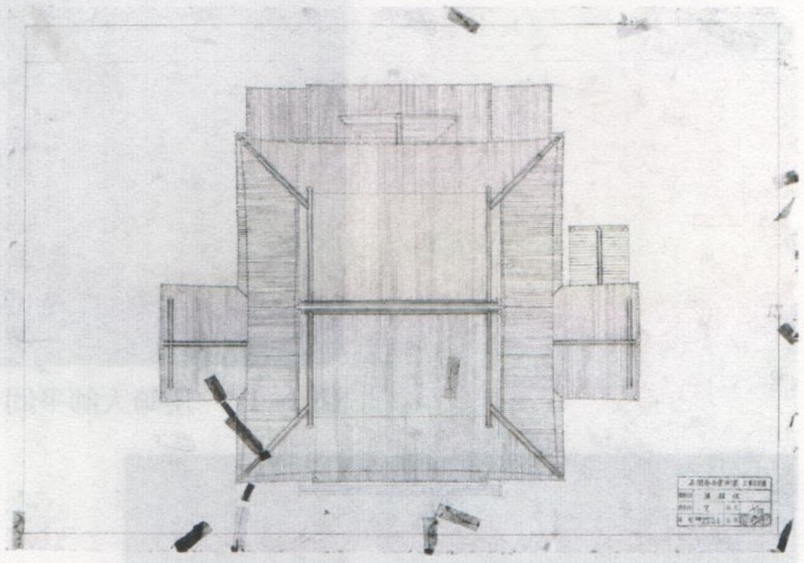


図 1−13　川崎大師平間寺本堂　屋根伏図

川崎大師本堂は法要等に関する寺側の要求から相当奥行きの深い平面にならざるを得ず（正面83尺×側面108尺）、飛鳥・奈良時代の建築のような屋根の形を再現するのが難しい。大岡はこの建物で、内陣奥側の身舎一間分に別の屋根を架け、大棟の位置を前面に出すことで棟が高くなりすぎないようにしている。裳階屋根を一段切り上げたのは、平等院鳳凰堂などに見られる「奈良平安で好んで用いられた形」を用いたものである。また、大岡は「部材の比例」に関しては飛鳥・奈良時代の建築を参照したという。身舎柱は繰り形付きの変形の断面形となり、鉄筋コンクリート造大規模建築の太い構造柱の印象を和らげ、裳階を付けることで外観上身舎柱を隠し、細い裳階柱が立面に現れるという古建築の意匠技法が応用されている。

図 1–14　川崎大師平間寺本堂　配筋図　（大岡資料 2-2-4-2-28）

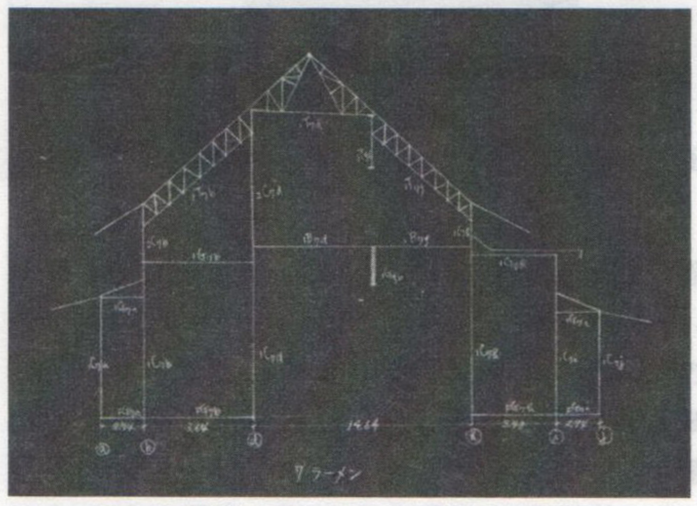


図 1–15　川崎大師本堂　構造概念図
（大岡資料 6-3-4-2）

川崎大師本堂の構造は鉄骨鉄筋コンクリート造で小屋組は鉄骨トラスである。小屋組は構造計算上、鉄骨トラス梁のラーメンとしつつ、合計７つのラーメンで構成されている（左図）。構造担当者が「形のためだけに棰木をつけたり斗栱の形を作ったりすることは出来るだけやめて、棰木、斗栱、出桁などすべての部分を構造材として利用する」という設計方針を掲げているように、垂木と斗栱を、荷重を負担する構造材として再現している。配筋図（上図）を見ると垂木は屋根下地のコンクリートと一体につくられ、構造計算書によれば、身舎垂木は屋根瓦や下地などを含め 514kg/m の荷重を受けるように設計されている。また、斗栱についても上層肘木（平）には 25.8t の荷重がかかっている。こうした構造材的な垂木と斗栱の扱いはこの作品以降は見られない。天井は「防火的見地と水平剛性を確保するため」にコンクリートのスラブになっている。

I -8

聖光寺本堂　長野県蓼科高原　1970

© 中塚雅晴

聖光寺（しょうこうじ）本堂は、トヨタ自動車販売で有名な実業家・神谷正太郎（1898 ～ 1980）を中心とする自動車販売業者一同の発起により、薬師寺長老・橋本凝胤の支援を得ながら、自家用自動車の普及で増加した交通事故の被害者の霊を鎮魂するために建設された「交通安全観音堂」である。昭和43年末頃より観音堂建立の準備に入り、翌年4月には宗教法人となり「蓼科交通安全観音堂建立募金委員会」が結成された。総工費は約1億6千万円で、昭和45年7月9日に落慶式が行われた。観音堂は重層だが、建坪29.4坪しかないので、予算は比較的潤沢であったといえる。大岡は鉄筋コンクリート造寺院建築の意匠に「飛鳥様式」のモチーフを多用したが、この建物はそれが最も顕著な事例である。なお、本尊は奈良時代の乾漆観音菩薩立像である。

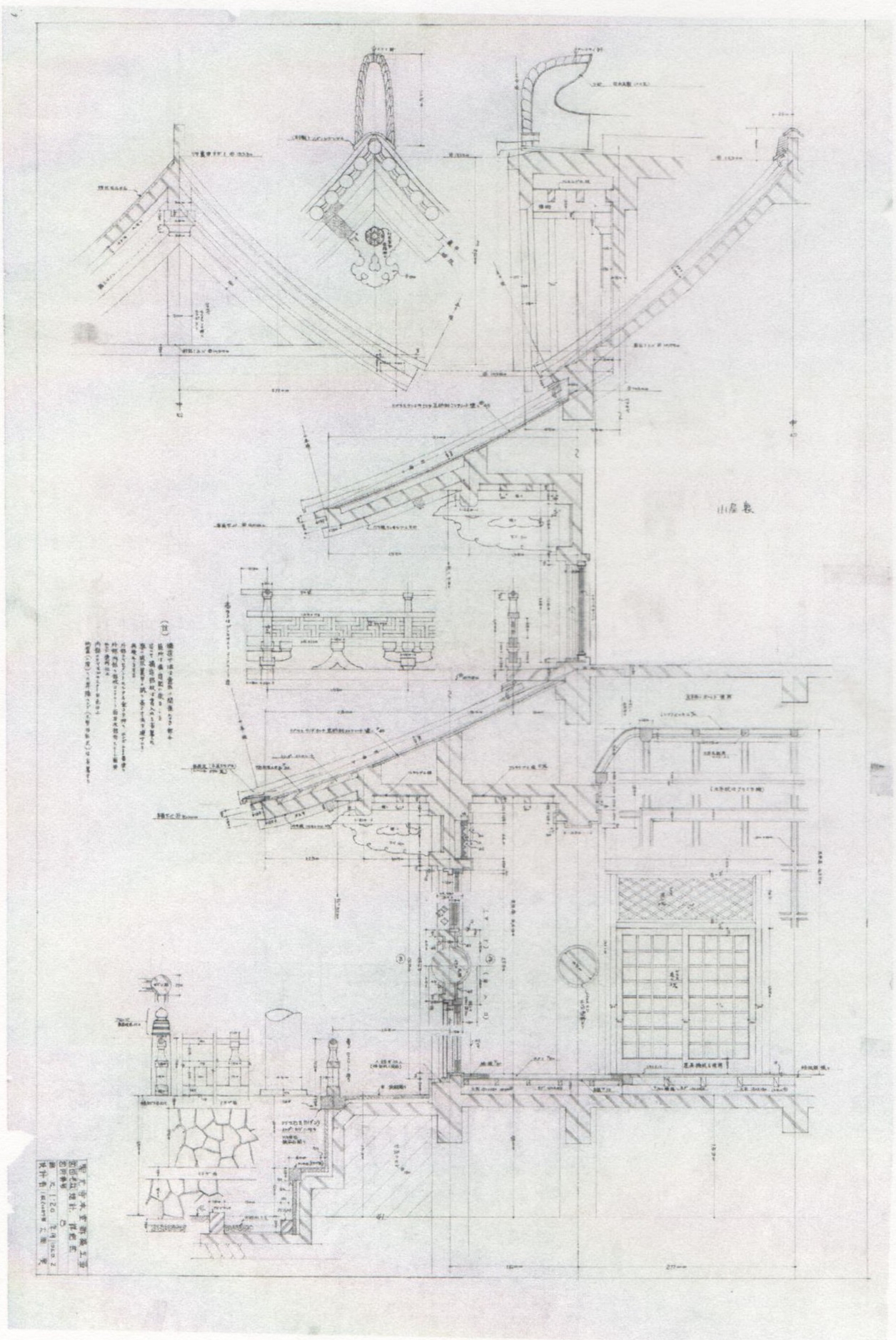
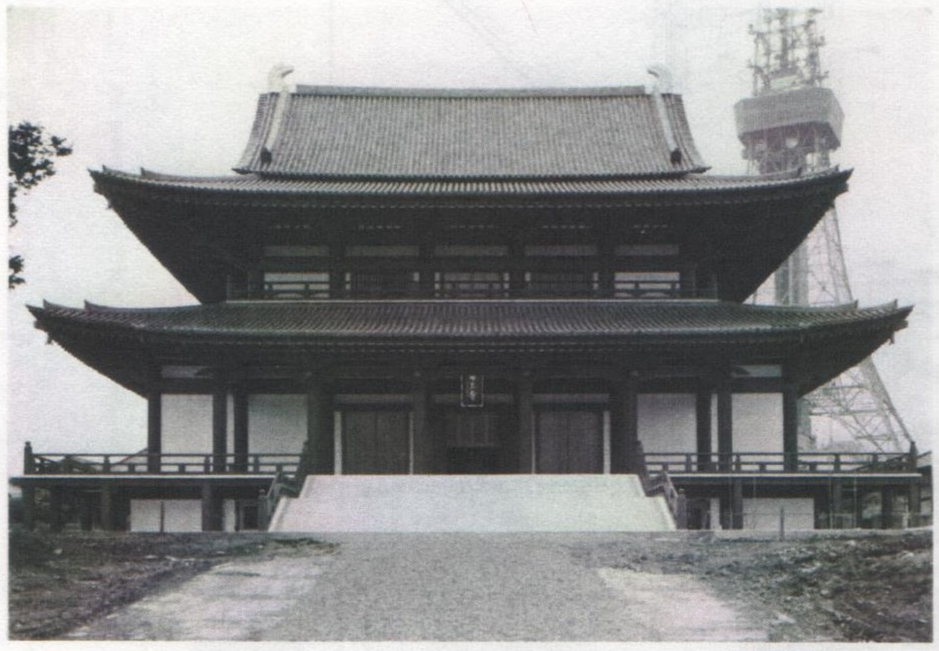


図1-24　聖光寺本堂　矩計詳細図

聖光寺本堂では飛鳥様式の細部意匠が多用されている。大棟を飾る鴟尾は、胴部に鳥の羽根を想起させる紋様をあしらい、鰭部に羽根飾りをめぐらす法隆寺玉虫厨子の鴟尾を引用したものである（左図では胴部は無紋だが、実施のものには文様がある）。錣葺きの屋根も玉虫厨子が参酌され、切妻と寄棟の屋根の反りを調整して両者を一体的に見せる工夫がされている。妻飾りの、緩やかに曲線を描く叉首棹は法隆寺金堂を連想させるし、上層の卍崩しの高欄意匠も法隆寺金堂のものをかなり正確にトレースしたものである。しかし、飛鳥様式で統一されているわけではない。雲形斗栱の上の力肘木の木鼻には大仏様系の繰り形が施され、雲形斗栱は法隆寺のものに近いが、曲線の性質が大分異なっている。懸魚は、蕨手（両脇の巻き込み）の少ない点で鎌倉時代によく見られる猪の目懸魚の形になっている。二重基壇には和様の組高欄を設えるが、その意匠は斗束上部が高く反り上がる薬師寺東塔のものによく似ている。

I −10

増上寺大殿　東京都港区　1974



(大岡資料 1-2-5-9)

東京都港区芝公園の増上寺は、徳川家の菩提寺であり、明治以降は浄土宗の東日本における総本山である。慶長 16 年(1611)に現在の地に初代本堂が建てられた。寛永 11 年（1634）に三代将軍家光が新たに二代目本堂を建設したが、明治 6 年(1873)の火災で焼失。明治 12 年に本堂再建が着手されたが、この三代目本堂は工事が完了しないまま明治 41 年（1908）の火災で焼失。その次の大正再建の四代目本堂は伊東忠太・木子幸三郎顧問、技師・佐々木岩次郎の木造本堂である。この本堂が昭和 20 年の空襲で焼失し、戦後に五代目本堂の設計に大岡が当たる事となった。大岡への設計依頼は昭和 44 年秋の事である。昭和 46 年 4 月起工、昭和 49 年 11 月 10 日落慶。

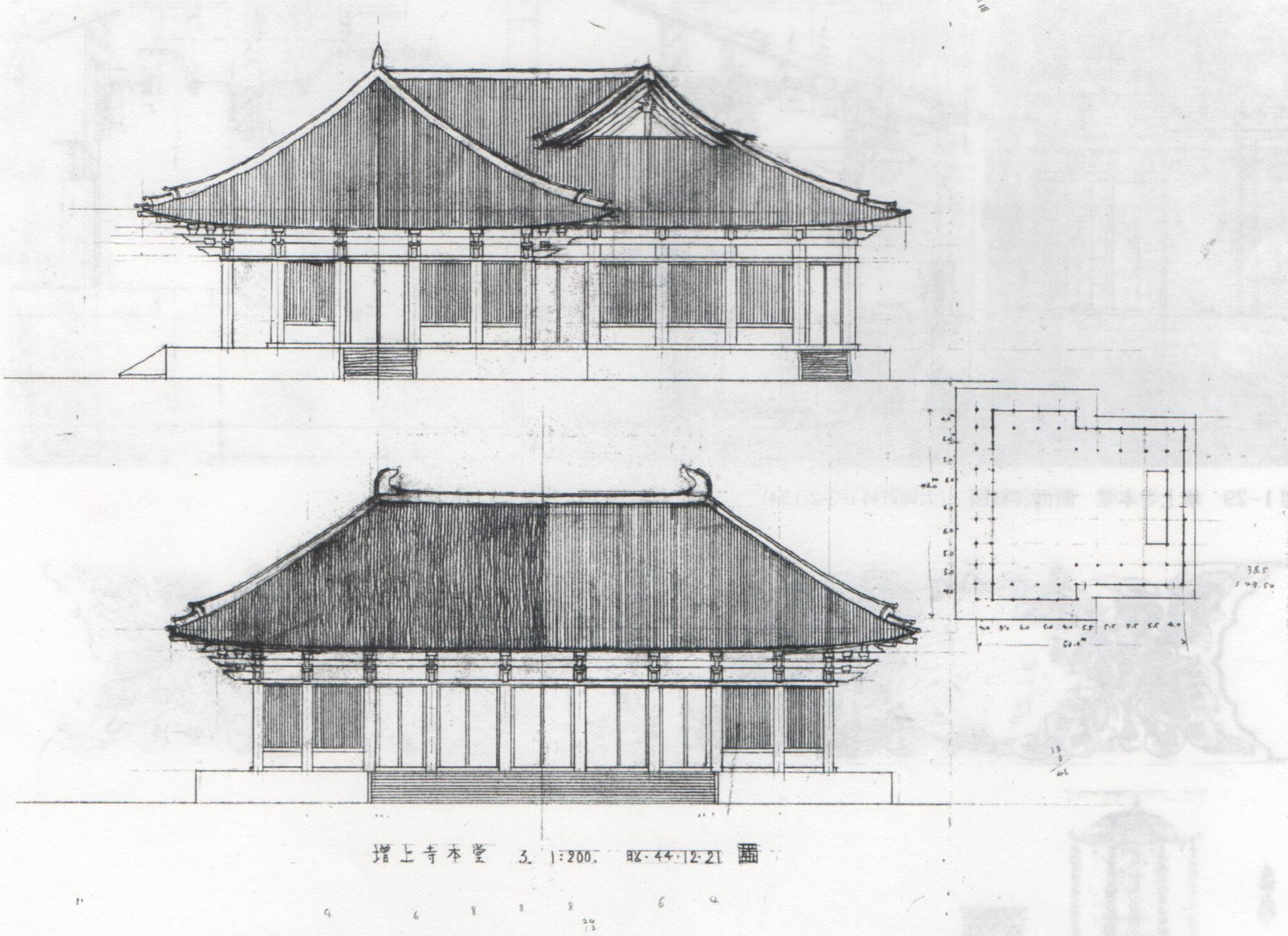


図 1−27　増上寺大殿　計画案　(大岡資料 6-3-2-134)

図 1−28　増上寺大殿模型・原寸図　視察風景
(大岡資料 1-2-5-9)

増上寺大殿では重層にするか単層にするかについて議論があった。寺側は当初、予算の都合から単層にする様に大岡に要請した。初代〜四代の増上寺本堂が全て単層だった事も寺側からの要請の根拠だったかも知れない。しかし大岡が「隣に三十米のプリンスホテルがあり背後に東京タワーを背負った環境で単層にしたのでは、出来上がった本堂が谷間に潜ったようになることは火を見るよりも明らかなので、絶対重層にしなければならないと主張し通した」結果、重層が採用された。法要上の関係からほぼ正方形の平面になる事は早い段階で決まっていたらしく、実施案だけでなく初期の設計案でもほぼ正方形の平面になっている。この平面に如何に屋根を乗せるかが最初の問題だったらしい。現存する最も古い設計案（上図）は、正面 1 間を吹き放ちとした唐招提寺金堂風の建物の背面に入母屋の建物を繋げた双堂形式の建物としている。なお、最終的な実施案では背面 1 間の屋根を葺き下ろして奥行を確保した。

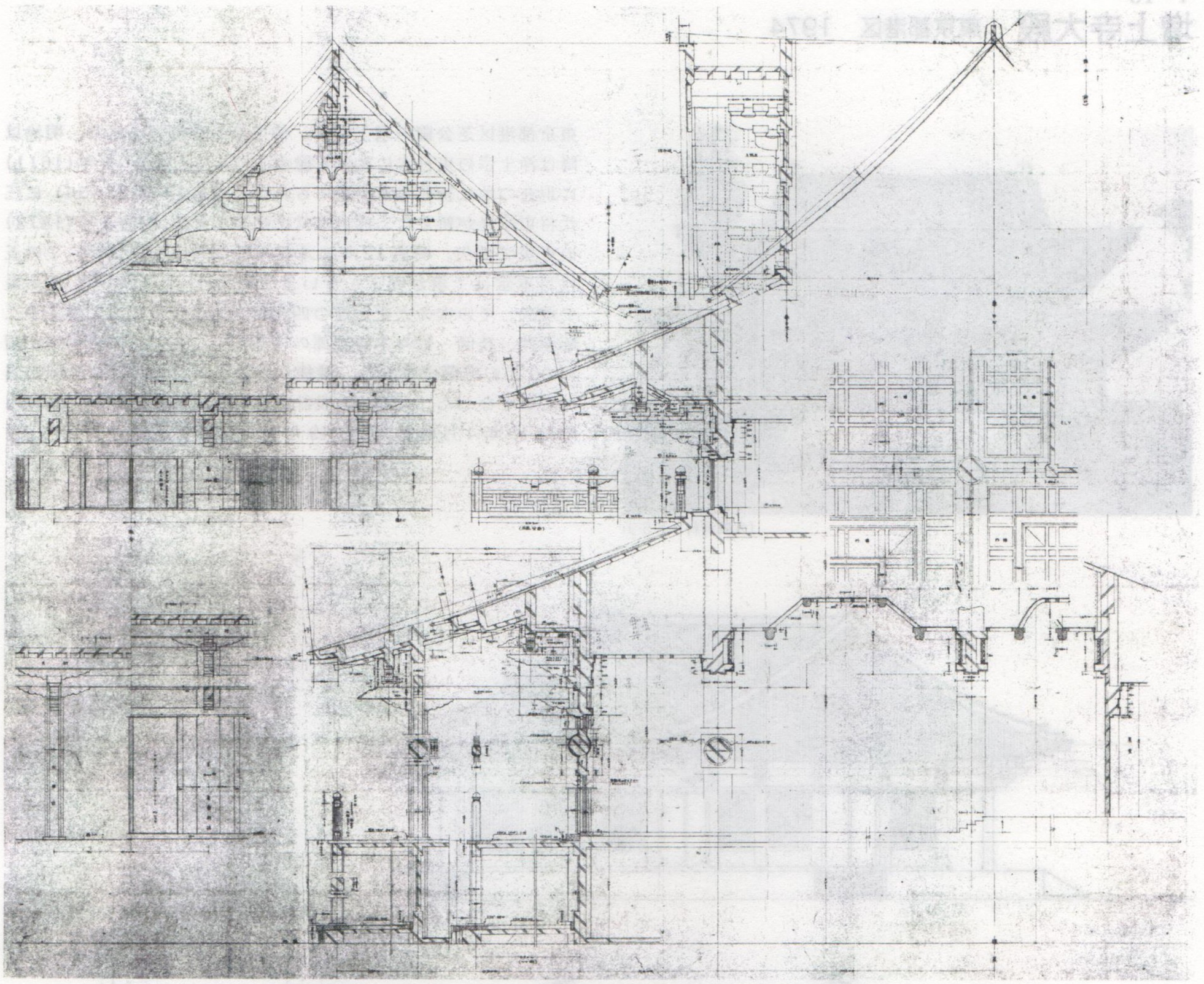
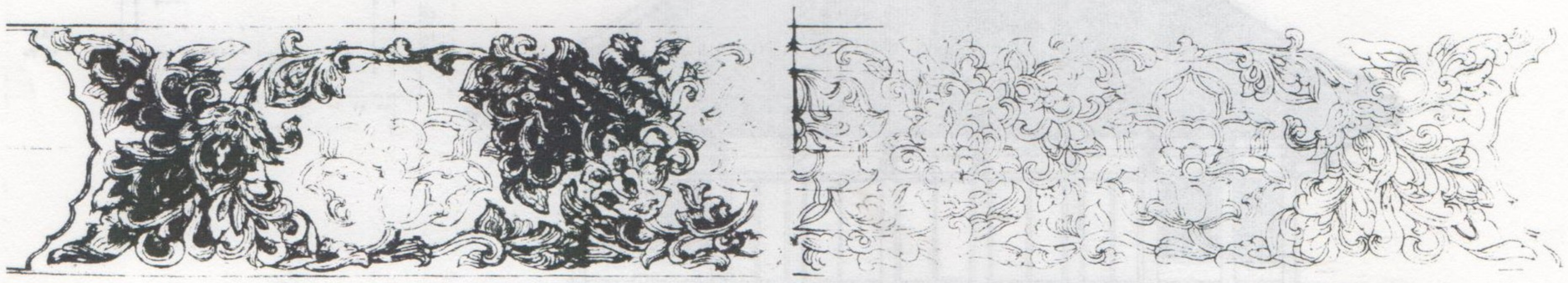


図 1–29　増上寺本堂　断面詳細図　（大岡資料 6-3-2-134）



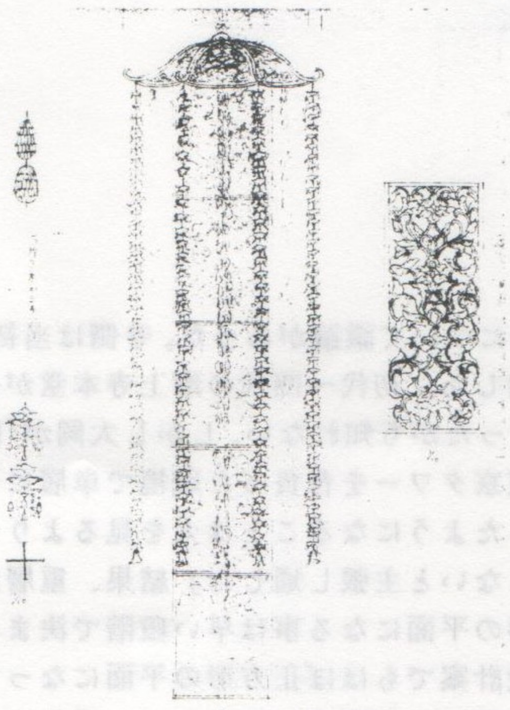


図 1–30　増上寺大殿仏壇廻り文様・幢幡スケッチ
（大岡資料 6-3-2-134）

組物は川崎大師平間寺本堂と似た、大仏様繰形の付いた挿肘木である（図 1–29）。通常は斜めになっている尾垂木（おだるき）という部材が水平になっており、この点は川崎大師とは異なる。上層の高欄は上図では卍崩しが描かれており、他にも複数の高欄の設計案が作成されたが、それらは実施されなかった。増上寺大殿では内部の仏壇・仏具も大岡が自ら設計している（図 1–30）。大岡は「文様は平安朝の宝相華唐草を主体としてまとめた。出来上って見ると少し模様が細か過ぎたかと思うが一人の感覚でとりまとめたので仏壇、天蓋、幡など統一的な意匠でまとめられたと信じている」と述べている（「増上寺本堂の建築」『建築画報』1975 年 6 月、p.27）。

Ⅱ-4

穴守稲荷神社 本殿・拝殿　東京都大田区　1964

（大岡資料 1-2-5-11）

第二世界大戦で壊滅的な被害をうけた穴守（あなもり）稲荷神社は、昭和20年9月、羽田空港拡張計画のために米軍に立ち退きを強いられた。そのため、羽田神社にとりあえず強制的に遷座されることになったが、昭和22年頃氏子たちの間で社殿再建の議が起こり、有志によって現在地を購入取得した。その後はしばらく仮設的な社殿で過ごしていたが、昭和33年5月頃に本殿・拝殿の再建構想が持ち上がった。同年7月に「本殿拝殿再建基本案」が関係者の間で議論され、その「基本案」によればこの時既に大岡に設計が依頼されることになっている。大岡は昭和33年12月に試案を作成し、翌年10月に基本設計図を作成した。総予算は約6千万円、施工者は大成建設である。昭和37年9月着工、昭和39年6月に竣工した。

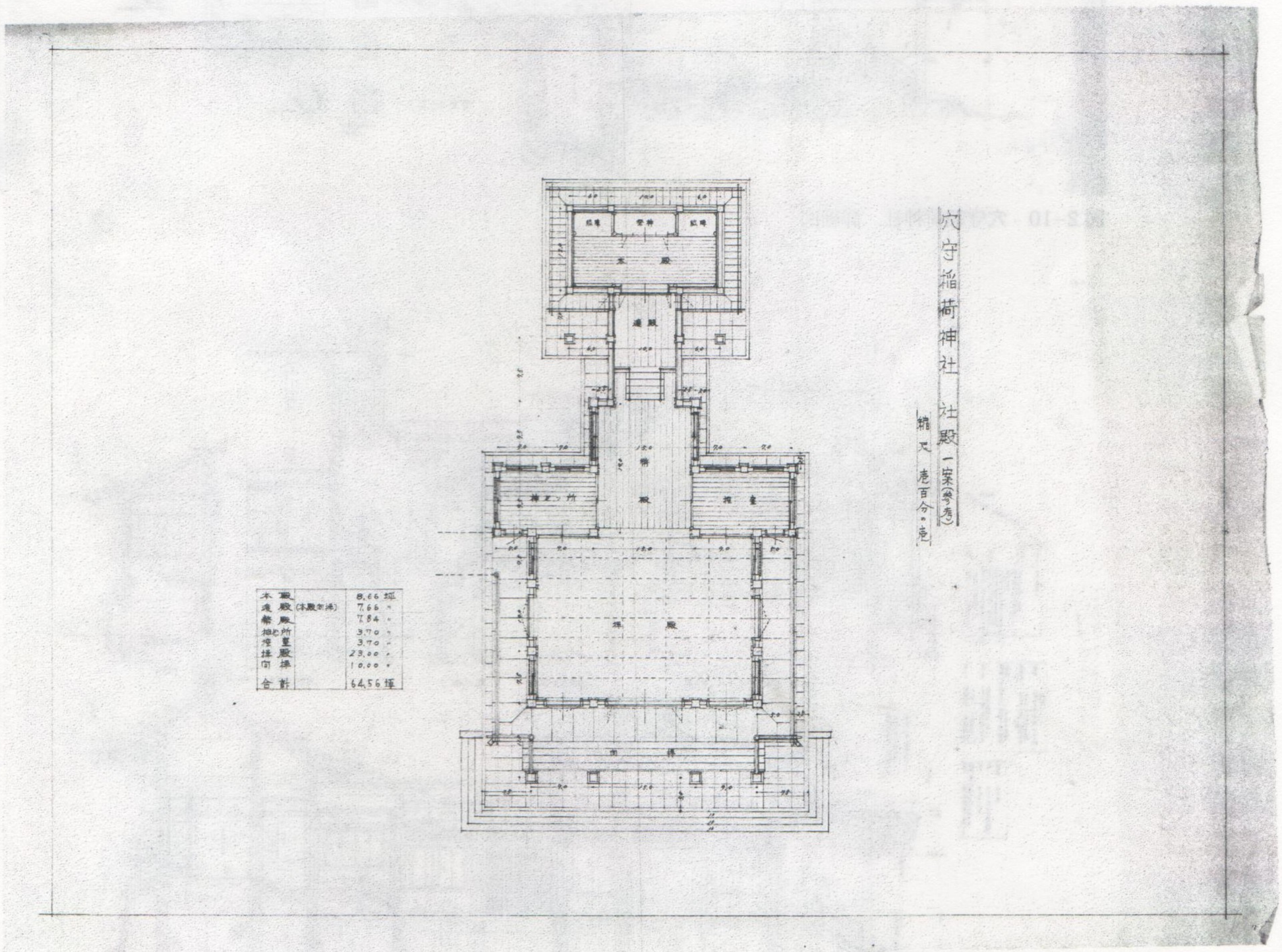


図2-8　穴守稲荷神社　第一案　立面図

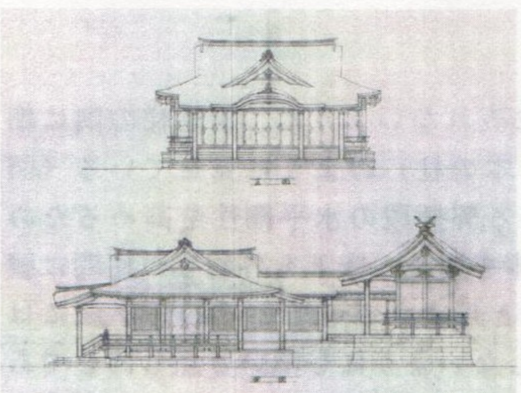


図2-9　穴守稲荷神社　第一案　立面図

全国の権現造り社殿には、本殿を流造りとするものも少なくない。穴守稲荷神社の計画案には第1～4案が残されているが、いずれも拝殿を入母屋造りとし、本殿を流造りとする計画案である。また、弊拝殿の概形や柱間寸法なども各案全く同じであるが、本殿の大きさと正面向拝の幅については各案で異なっている。本殿は、第1案は三間社で、第2～4案は一間社となり、正面向拝は第1～3案は三間幅で、第4案は一間幅である。本殿と弊殿の床高の差や、本殿と弊殿を繋ぐ渡殿の奥行きと幅も各案で異なり、検討されている。最終的には、本殿を三間社、向拝を三間幅とする第一案に近いかたちで実施されたが、実施案では本殿の床高は第一案よりも高くなり、本殿の蟇甲も第一案よりも大きくとられている。

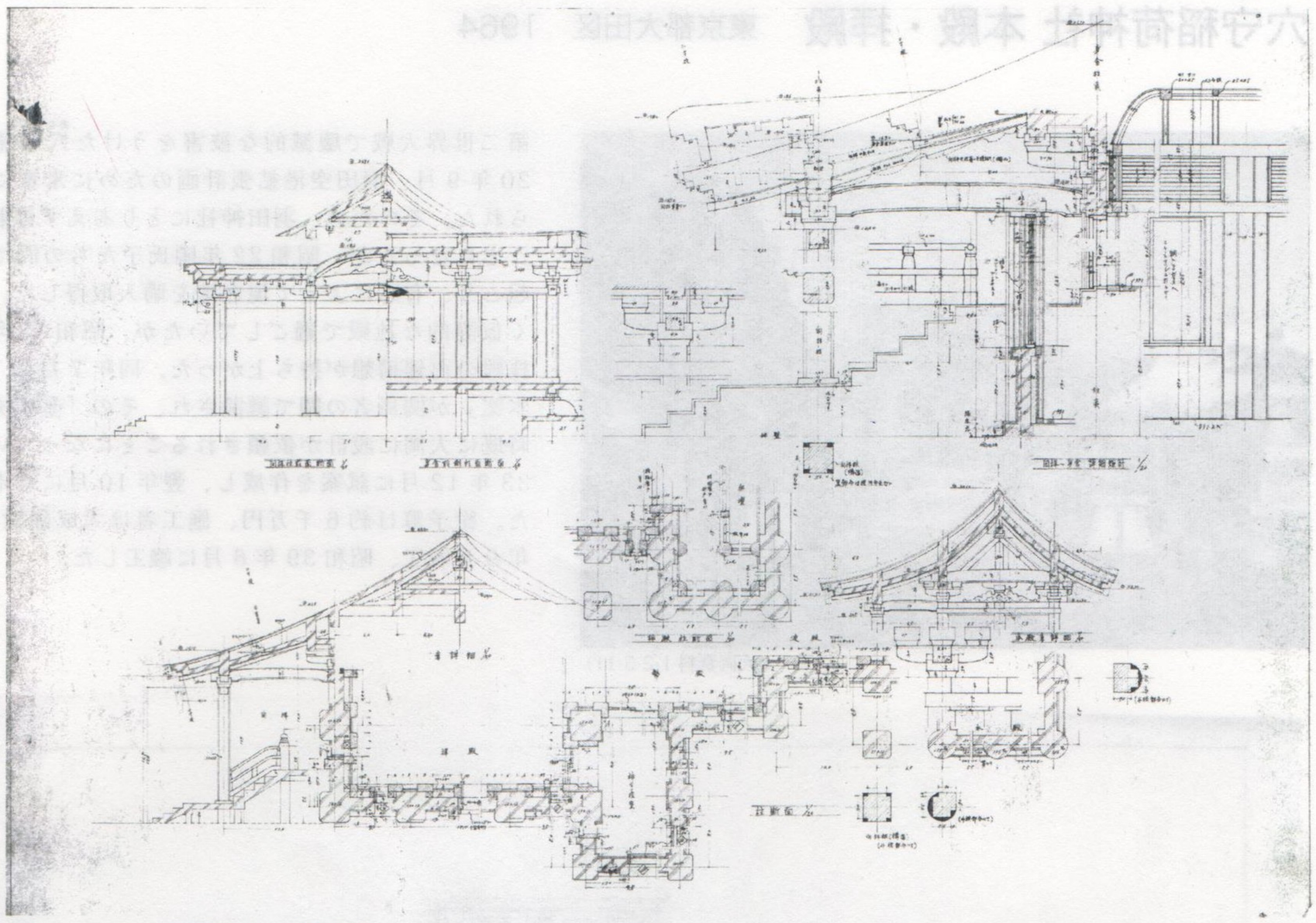


図 2–10　穴守稲荷神社　詳細図

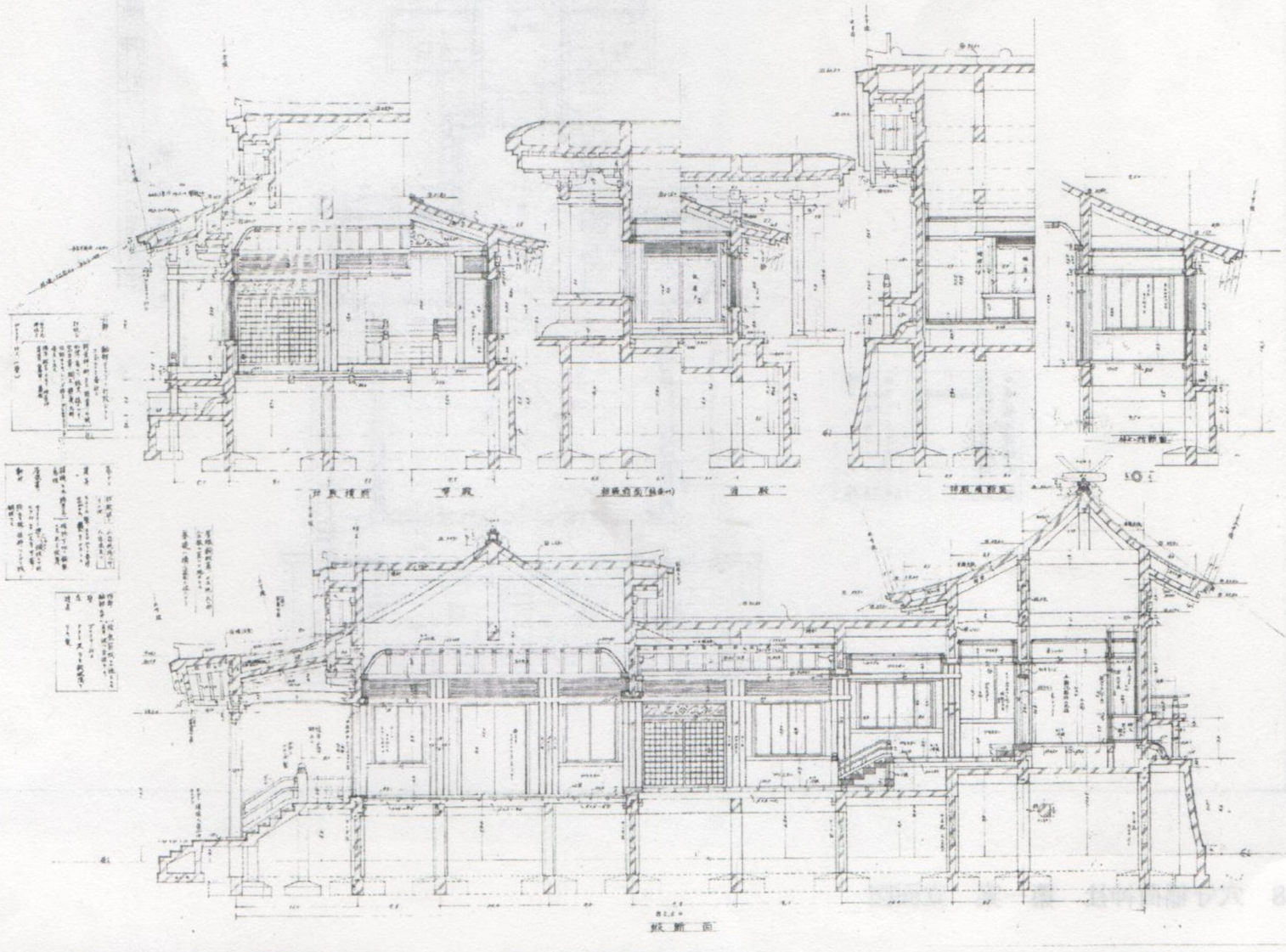


図 2–11　穴守稲荷神社　断面詳細図

太い構造柱（1.2 尺 ×1.2 尺）がそのまま内部に表れないように、構造柱の隅に細い柱型（6 寸角）を作り出して「吹寄せ柱」（2 本の柱）のように見せている（図 2–10）。壁が少なく開放的なつくりになっている弊拝殿の水平剛性を高めるために、外壁開口上の小壁に鉄筋コンクリートの壁体を廻し、床下も外廻りの柱間に腰壁を廻して下部を固めている点は他の神社建築と共通する（図 2–11）。小壁には横連子の欄間を付けて内部空間に構造体が露出しないようにしている点も同じであるが、この建物の弊拝殿は、長押上小壁の位置において、「吹寄せ柱」の柱間溝に照明器具を仕込んでいる点でユニークである。

Ⅲ-4

薬師寺金堂（基本設計）　奈良県奈良市　1976

（大岡資料 1-2-5-19）

昭和再建の薬師寺金堂は大岡實の基本設計によるもので、全体的な設計方針は大岡の他、浅野清、太田博太郎らを構成員とする復興委員会建築小委員会で策定された。大岡はすでに昭和29年頃から金堂の復原案作成に取り組んでいた。復元設計が正式に依頼されたのは昭和44年頃で、実施に向けた1/10模型が作成される翌年10月頃までに12案以上の基本設計図が作成された。構造は、内陣を鉄骨鉄筋コンクリート造として、その外部を木造とする混構造で、それは大岡の意向に沿うものであった。基本設計の段階では、屋根を錣葺きにしていたが、設計委員会で容認されず、実施では通常の入母屋造りとなった。なお、再建前には天文弘治年間建立の旧金堂が建っていたが、その建物は、大岡の設計監理により、入母屋造りを寄棟造りに変えるなどの改変が施されながら、興福寺講堂跡地に仮金堂として移築・改修された。

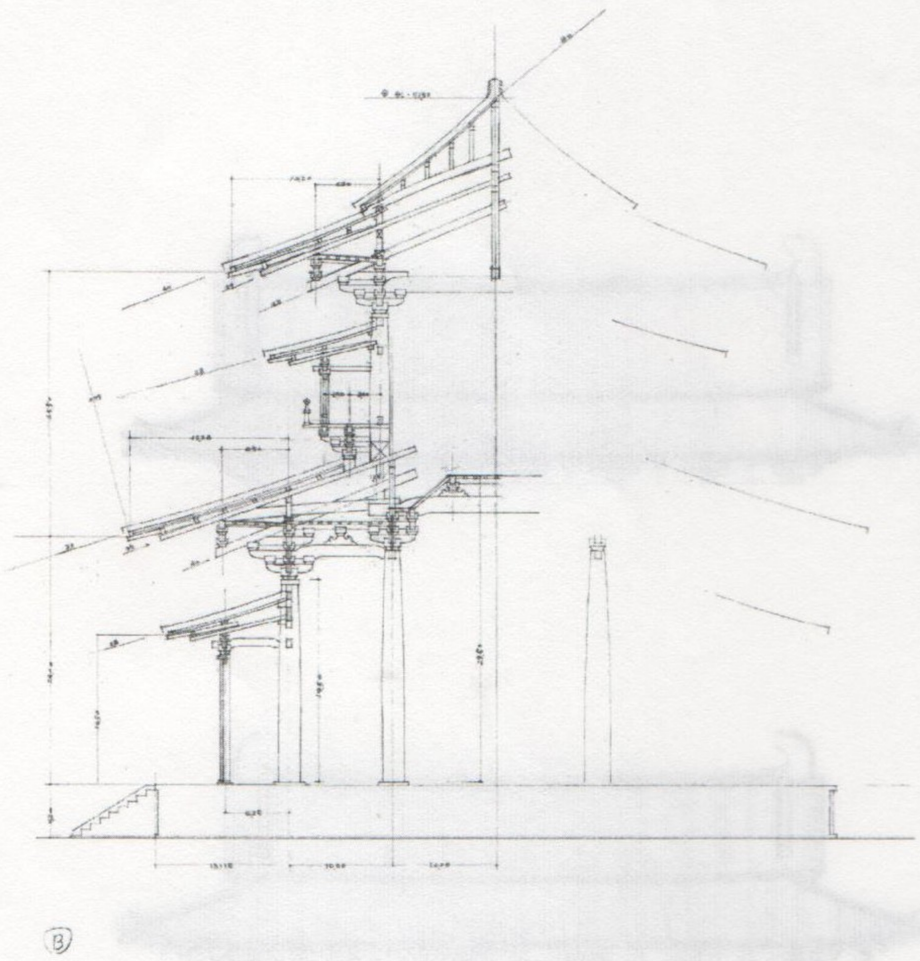


図 3-6　薬師寺金堂　第 5 案　断面図

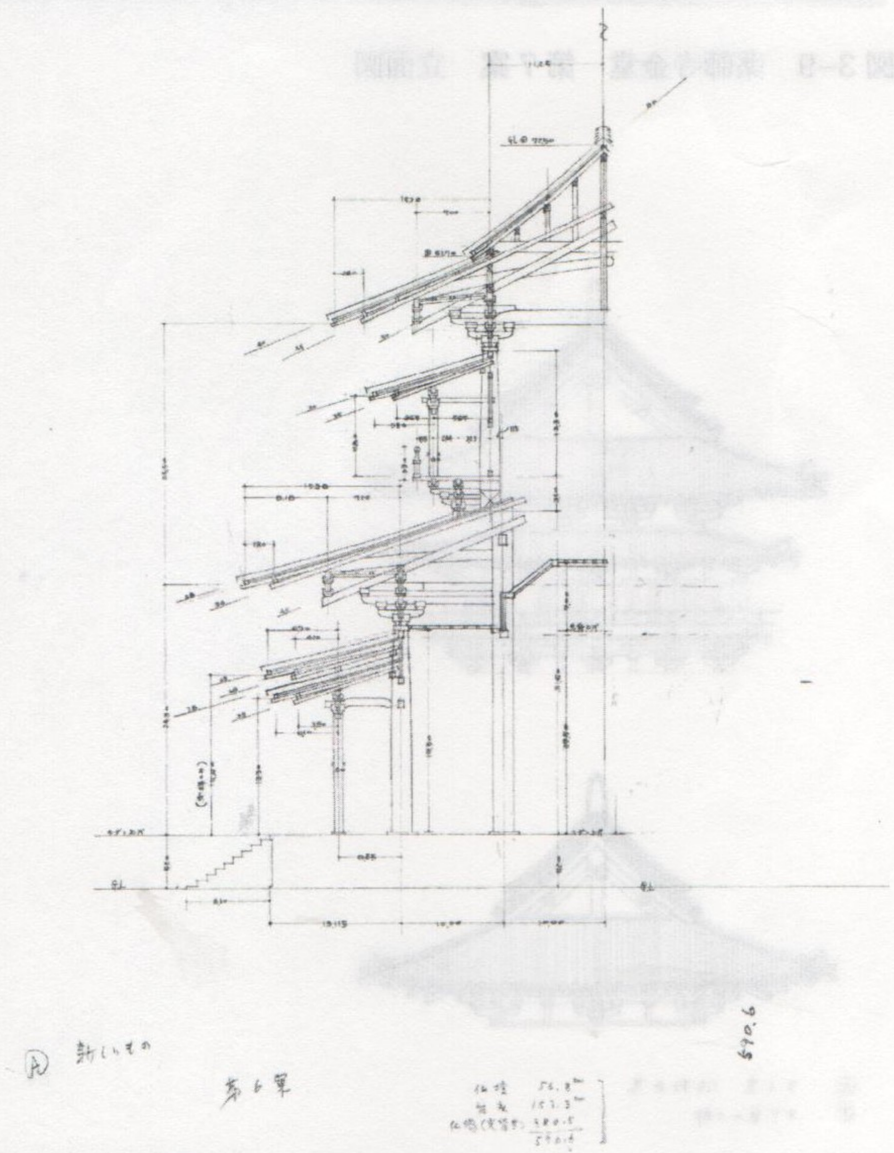


図 3-7　薬師寺金堂　第 6 案　断面図

図 3-8　薬師寺金堂内部（大岡資料 1-2-5-19）

大岡實は、奈良時代金堂の意匠的特徴の一つに「ドーミカルな空間構成」をあげていた。「ドーミカル」とは、外側から内側にむかって次第に天井が高くなる内部空間のことである。設計のプロセスでは、第 6 案（上図）において、内部に安置する薬師三尊像の高さを考慮して内陣の天井高を 3 尺下げるという設計変更があったが、それに関連して外陣の天井高も 1.7 尺程度下げられた。その一方で、文献史料から側柱高 1 丈 9 尺 5 寸は動かせなかったので、外陣天井は斗栱の下に設置せざるを得なくなり、結果的に内部から斗栱が見えなくなった。また、大岡は第 5 案における裳階の高さが「低すぎる」と考えていたが、上記の変更に伴い、やむを得ず裳階をさらに低くした。こうした一連の設計変更の過程から、「ドーミカルな空間」の実現を何よりも優先させた大岡の造形意欲がうかがえる。

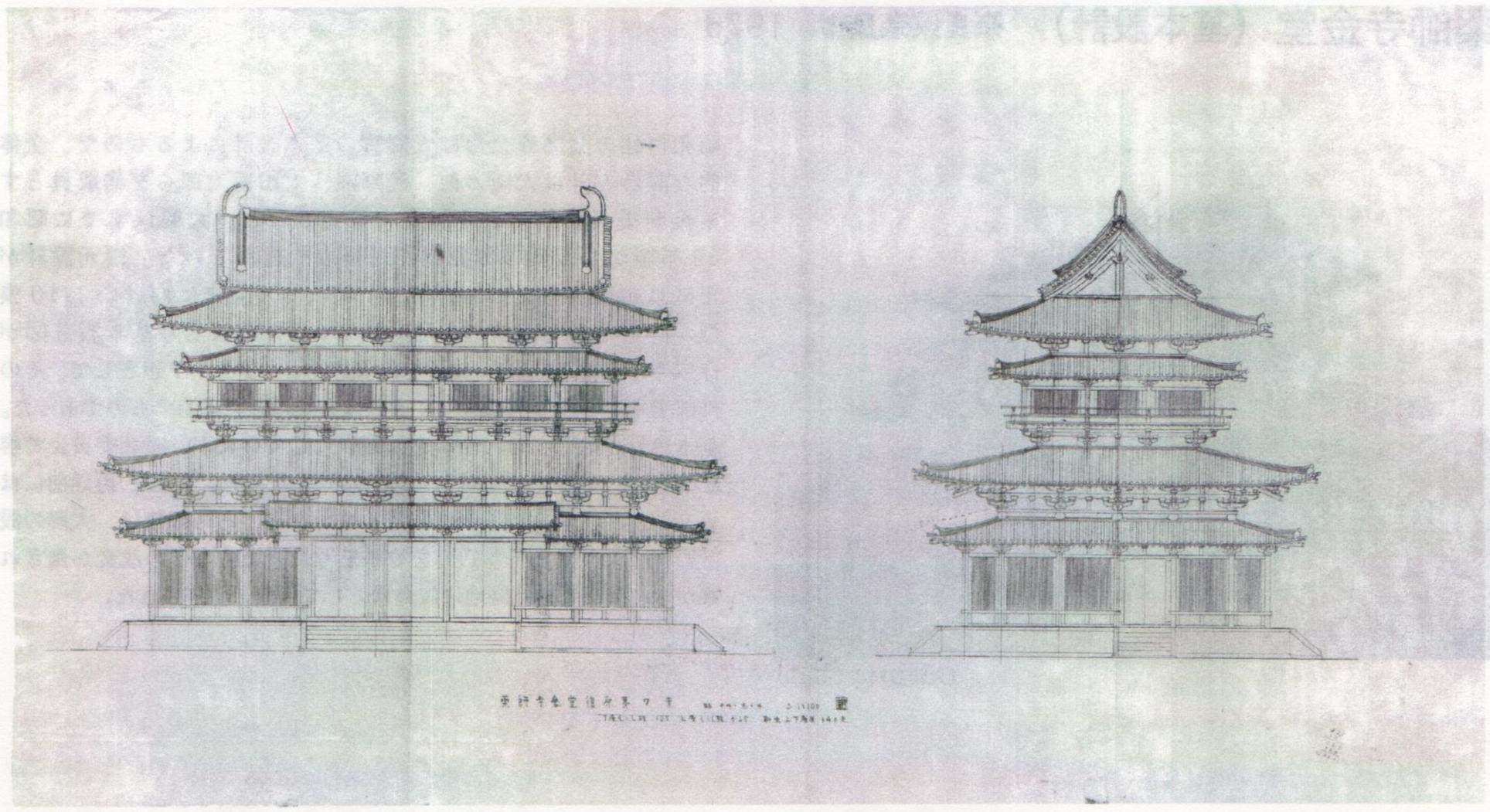


図3–9　薬師寺金堂　第7案　立面図

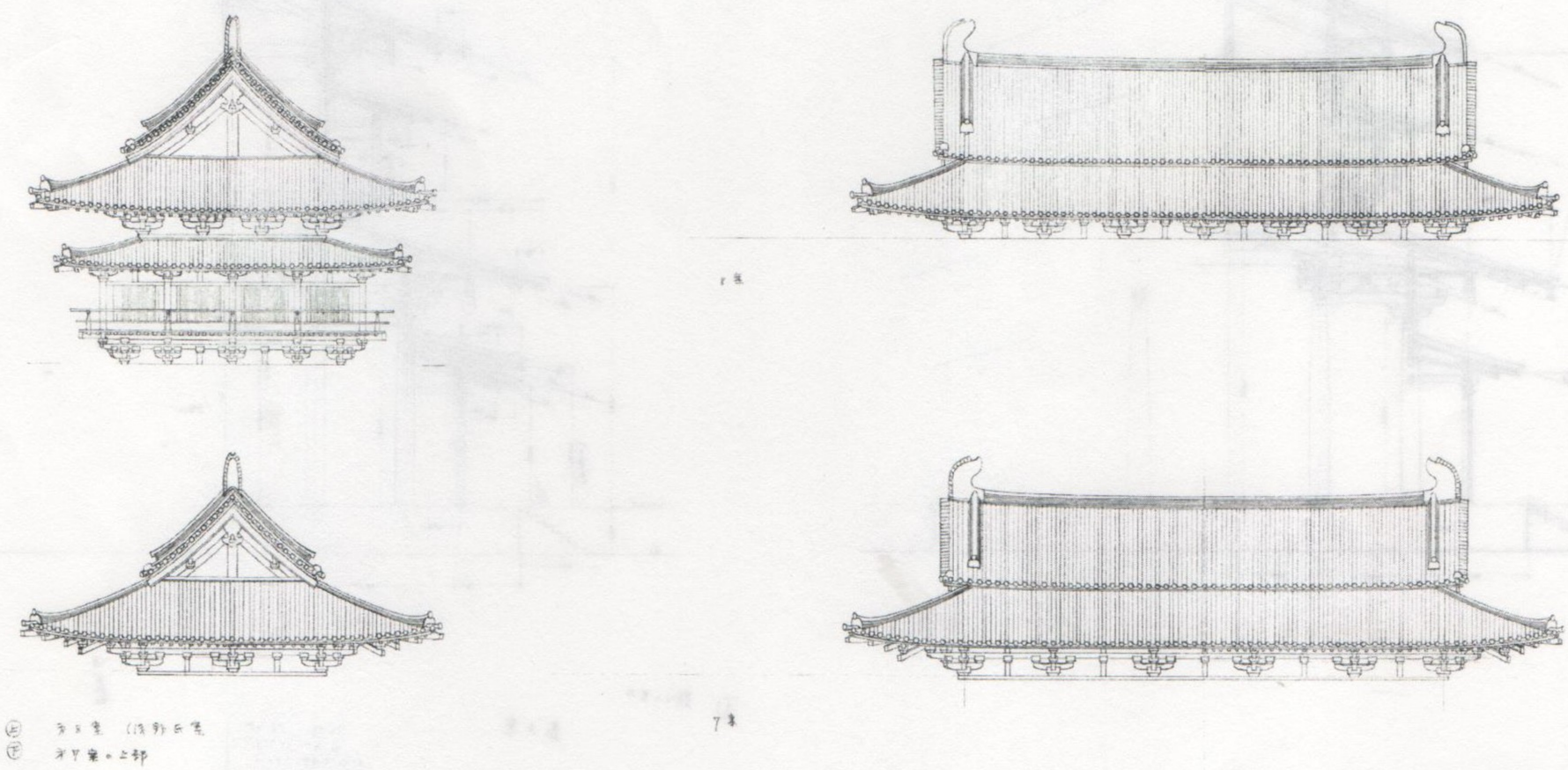


図3–10　薬師寺金堂　第7案（下）・第8案（上）　上層比較図

長和4（1015）年撰録の『薬師寺縁起』に「二重二閣」とあり、かつて金堂は二重で各層に裳階が付くという姿をしていたことがわかるが、柱礎石が残る初重とは異なり、上重の柱間の数についての解釈は様々で、大岡と浅野にも違いがあった。上図に見るように、大岡案（第7案）は上重を桁行5間梁間2間とするのに対し、浅野案（第8案）は桁行6間梁間3間としている。両案とも桁行・梁行ともに総長は同じであるから、おそらく浅野が梁間3間としたのは、奥行きが浅く見える印象を少しでも軽減しようとしたためであろう。一方の大岡も、奥行きの浅いこの建物の形を整えることに苦心したということを述べているから、両者の問題意識は同じであった。それでも大岡が梁間2間を主張したのは、斗栱間に「ゆったり」とした間隔をとることを、奈良時代金堂の造形上重要なポイントと考えたためであった。